

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（22）

県営畑地帯総合土地改良事業曾於東部二期地区（別府上工区）
に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

下 田 遺 跡

1992年3月

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会



下田遺跡出土耳栓

序 文

本町は埋蔵文化財包蔵地が多く、前川・安楽川の流域を中心に約200ヵ所の周知の遺跡が知られております。

近年、宅地開発や農業基盤整備事業の増加に伴い、これらの遺跡の緊急確認調査も又急増しています。

今回調査しました下田遺跡の確認調査、並びに緊急発掘調査も県営畑地帯総合土地改良事業曾於東部二期地区の実施に先立って行われたものです。

ここにその調査結果を報告書として刊行いたしますが、この資料が歴史解明の一助となり、文化財の保護と学術研究のために広く活用されれば幸いです。

発刊にあたり、御指導いただいた各先生方、作業協力者の皆様、又調査に御協力を頂きました土地所有者・並びに関係各位に対し、心よりお礼申し上げます。

平成4年3月

志布志町教育委員会

例 言

1. この報告書は県営畑地帯総合土地改良事業曾於東部二期地区（別府上工区）に伴う下田遺跡の埋蔵文化財確認調査報告書である。
2. 調査は、鹿児島県農政部（大隅耕地事務所）からの委託事業として志布志町（志布志町教育委員会）が委託し調査主体者となり、平成3年10月25日から平成3年12月30日まで実施した。
3. 調査における実測および測量、写真撮影は、米元と小村が分担して行った。
4. 調査および整理作業については鹿児島県教育委員会文化課の指導、教示を受けた。
5. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
6. 遺物はすべて通し番号とし、挿図、図版とも一致する。
7. 出土遺物は志布志町教育委員会で保管し、公開展示する予定である。
8. 本書の執筆および編集は米元、小村が行った。

目 次

巻頭カラー	
序文	
例言	
目次	
第1章 調査の経過	7
第1節 調査に至るまでの経過	7
第2節 調査の組織	7
第3節 調査の経過	8
第2章 遺跡の位置・環境及び周辺遺跡	10
第1節 遺跡の位置・環境	10
第2節 周辺遺跡	11
第3章 層位	14
第4章 調査の概要	15
第1節 調査の概要	15
第2節 各トレンチの調査	15
第3節 B地区緊急確認調査	22
第4節 出土遺物	27
第5章 まとめにかえて	55
あとがき	73

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	13
第2表 B地区の出土土器観察表	57

挿 入 目 次

第1図 下田遺跡周辺の遺跡	12
第2図 下田遺跡基本層序	14
第3図 下田遺跡1トレンチ土層断面図及び集石出土状況	15
第4図 下田遺跡トレンチ配置図(施工前)	16
第5図 下田遺跡トレンチ配置図(施工後)	17
第6図 下田遺跡2, 3, 4トレンチ土層断面図	18

第7図	下田遺跡5. 6トレンチ土層断面図	19
第8図	下田遺跡7. 8トレンチ土層断面図	20
第9図	下田遺跡9. 10トレンチ土層断面図及び平面図	21
第10図	10トレンチ出土土器実測図	22
第11図	B地区遺物出土状況及びグリッド設定図・発掘区地形図	23
第12図	B地区1号畦畔土層断面図	25
第13図	B地区2号畦畔土層断面図	27
第14図	I～II類土器実測図	29
第15図	II～IV類土器実測図	30
第16図	V類土器実測図(1)	31
第17図	V類土器実測図(2)	32
第18図	V類土器実測図(3)	34
第19図	V類土器実測図(4)	35
第20図	V類土器実測図(5)	36
第21図	V類土器実測図(6)	38
第22図	V類土器実測図(7)	39
第23図	V類土器実測図(8)	40
第24図	V類土器実測図(9)	41
第25図	V類土器実測図(10)	43
第26図	V類土器実測図(11)	44
第27図	V類土器実測図(12)	45
第28図	V類土器実測図(13)	46
第29図	V類土器実測図(14)	47
第30図	V類土器実測図(15)	48
第31図	V類土器実測図(16)	50
第32図	V類土器実測図(17)	51
第33図	V類土器実測図(18)	52
第34図	VI類土器実測図(1)	53
第35図	VI類土器実測図(2)	54
第36図	耳栓および石器実測図	55

図版目次

図版1	トレンチ土層断面・集石出土状況	
	B地区1、2号畦畔土層断面・遺物出土状況	61

図版 2	遺物出土状況	62
図版 3	遺物出土状況	63
図版 4	遺物出土状況	64
図版 5	第Ⅰ～Ⅳ類土器（3～15）・第Ⅴ類土器（6～30）	65
図版 6	第Ⅴ類土器（31～58）	66
図版 7	第Ⅴ類土器（59～79）	67
図版 8	第Ⅴ類土器（80～108）	68
図版 9	第Ⅴ類土器（109～132）	69
図版10	第Ⅴ類土器（133～160）	70
図版11	第Ⅴ類土器（161～179）	71
図版12	第Ⅵ類土器（180～195）	72

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会では、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るため、関係各機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部（農地整備課・大隅耕地事務所）は、志布志町別府上工区における県営畑地帯総合土地改良事業（曾於東部二期地区）の計画策定にあたり、実施計画区域内の埋蔵文化財の有無について、県文化課に照会した。

これを受けて文化課は、昭和63年4月当該地区の埋蔵文化財分布調査を志布志町教育委員会と実施した。

分布調査の結果、当該事業区域内に下田遺跡の存在していることが判明したので、事業実施前に遺跡の範囲・性格などを把握するための確認調査を実施することとなった。

第2節 調査の組織

調査主体者 志布志町教育委員会

調査責任者	〃	教 育 長	徳重俊二
調査事務	〃	社会教育課長	慶田泰輔
	〃	課 長 補 佐	井手富男
	〃	文化体育係長	下平晴行
	〃	主 査	米元史郎
	〃	主 事	中窪 徹
	〃	主 事	荒平安次
	〃	主 事	小村美義
	〃	主 事	松崎陽子
調査担当者	〃	主 査	米元史郎
	〃	主 事	小村美義

なお、調査企画等において、県教育庁文化課長・向山勝貞氏、同主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長・吉元正幸氏の指導・助言を得た。

遺物整理・報告書作成においては、県文化課埋蔵文化財系の専門職員各氏並び知覧町社会教育課文化係上田耕氏の指導助言を得た。

第3節 調査の経過

確認調査は、鹿児島県からの受託事業として、志布志町教育委員会が調査主体者として実施した。その結果、事前計画地区内にA地区（1トレンチ）・B地区（10トレンチ）の2地区に遺物を出土する地域があることが判明した。

この調査結果の概要については、確認調査発掘作業終了直前に、調査の現場において関係者（大隅耕地事務所・町耕地課）立ち合いのもと、状況報告を行った。

これを受けた事業主体の大隅耕地事務所は、実施計画再検討の結果、A地区並びにB地区の10トレンチ部分については、設計変更のうえ現地保存の措置をとるがB地区の一部10トレンチに隣接する、遺物散布地（以下B地区とする）の畑地部分については、設計変更の措置を取り得ず削平対象区域となるため、継続的な発掘調査の実施を要望した。この為志布志町教育委員会は対象面積に伴う経費を確認の上、確認調査に引き続きこの削平対象区域の緊急発掘調査を実施することにした。

現地の調査は、平成3年11月25日から12月30日までの実数25日間実施した。

確認調査のトレンチ配置は地形等を考慮し、遺跡の立地条件の良い箇所や工事等によって削平されると思われる部分を中心として2×4mのトレンチ10ヵ所を設定した。

又、遺物の集中散布地の発掘調査に際しては、直前に遺物包含層の存在と遺物の範囲を確認するため10×1m4箇所と2×2m1箇所のトレンチ掘りの後、全面調査に移行した。

この間の調査の経過については、下記概要の通りである。

尚、調査経過の記載については、確認調査期間中の協議決定を受けて発掘調査に移行した為、一部に調査が並行して行われた時期もあり、継続して記載する。

11月25日（月）用具搬入。確認点検。作業員への調査方法・調査上の留意点の説明。

1, 2, 3トレンチ設定。1, 3トレンチ掘り下げ開始。

11月26日（火）4, 5, 6, 7, 8, 9, 10トレンチ設定。1, 3トレンチ掘り下げ。

11月27日（水）雨の為中止。

11月28日（木）1, 3, 5トレンチ掘り下げ、トレンチ位置図作成。午後雨の為中止。

11月29日（金）雨の為中止。

12月2日（月）1, 3, 5, 6トレンチ掘り下げ。2, 4, 6, 7, 8, 9, 10トレンチ位置図作成。

1トレンチより集石遺構検出。

12月3日（火）3, 4, 5, 6トレンチ掘り下げ。3トレンチ完掘。

12月4日（水）4, 5, 6トレンチ掘り下げ。各トレンチ標高設定。

12月5日（木）4, 5, 6, 10トレンチ掘り下げ。5, 6トレンチ完掘。

12月6日（金）4, 10トレンチ掘り下げ。4トレンチ完掘。3トレンチ土層断面写真撮影実測。

12月9日（月）7, 8, 10トレンチ掘り下げ。

- 12月10日（火）7, 8, 10トレンチ掘り下げ。4, 5, 6トレンチ土層断面写真撮影、実測。
- 12月11日（水）7, 8, 10トレンチ掘り下げ。10トレンチ完掘。
- 12月12日（木）2, 7, 8, 9トレンチ掘り下げ。10トレンチ出土遺物写真撮影。
- 12月13日（金）1, 2, 7, 8, 9トレンチ掘り下げ。2, 7, 8トレンチ完掘。
- 12月16日（月）1, 9トレンチ掘り下げ。1, 9完掘。2トレンチ土層断面写真撮影、実測。大隅耕地事務所と現地協議。
- 12月17日（火）7, 8, 10トレンチ土層断面図写真撮影、実測。1トレンチ集石遺構写真撮影。B地区グリッド設定。試掘トレンチA, B, C, D, E設定、掘り下げ。A, B, Cトレンチ大半は包含層が削平されている。D, Eより土器出土。
- 12月18日（水）1, 9トレンチ土層断面写真撮影、実測。10トレンチ出土遺物標高・平板実測。B地区重機により表土剥ぎ。B6区, B7区, B8区, B9区包含層掘り下げ、遺物出土。
- 12月19日（木）1トレンチ集石遺構実測。B地区重機により表土剥ぎ。C5区, C6区, D5区, D6区包含層掘り下げ、遺物出土。
- 12月20日（金）1トレンチ集石遺構実測。B地区重機により表土剥ぎ。B3区, C3区, C4区, D3区, D4区包含層掘り下げ、遺物出土。
- 12月21日（土）1トレンチ集石遺構実測。B地区重機により表土剥ぎ。A1区, A2区, B1区, B2区, C2区, D2区包含層掘り下げ、遺物出土。
- 12月24日（火）B地区重機により表土剥ぎ。A10区, A11区, B10区, B11区包含層掘り下げ、遺物出土。
- 12月25日（水）B地区重機により表土剥ぎ。1, 2号畦畔土層断面図撮影・土層断面実測。B10区, C9区, C10区, C11区包含層掘り下げ、遺物出土。
- 12月26日（木）B地区1号畦畔取り外し。C7区, C8区, D7区, D8区包含層掘り下げ、遺物出土。
- 12月27日（金）B地区2号畦畔取り外し。C5区, C6区, C7区, C8区, C9区包含層掘り下げ、遺物出土。B地区完掘。発掘作業終了。機材搬出。水洗後収納。
- 12月28日（土）B地区遺物出土状況写真撮影。出土遺物標高・平板実測。
- 12月29日（日）B地区出土遺物標高・平板実測。
- 12月30日（月）B地区完掘地形測量。グリッド配置図平板測量。調査完了。測量用具・出土遺物搬出。撤収。

第2章 遺跡の位置・環境と周辺遺跡

第1節 下田遺跡の位置・環境

本町は鹿児島県の東端部で、志布志湾の湾奥に位置し、海岸線は東西に約10km、内陸部に向かって約24kmで、南北に細長く伸びる釣鐘形の形状をなしている。

北東から東側へは宮崎県都城市及び串間市と接して県境をなし、北西から西側へは末吉町、松山町、有明町とそれぞれ接している。

南面する海岸線は、ほぼ中央に位置する市街地を挟んで、西側は砂浜海岸が続くの比べ、東側は日南層群で構成される山稜が海までせまり岩礁海岸を形成している。なお、市街地は、比高40m程のシラス台地の海食崖下に発達した古期砂丘上に立地しており、これは約6000年前の縄文海進の名残りと考えられる。

内陸部の地形は、北部から東部にかけての山稜地帯は、主に新生代古第三期の地層と考えられている日南層群よりなる南那珂山系の西端域となり、これより西へ広がる広大なシラス台地（曾於丘陵地）には、この山系より派生する残丘状山地が北東より南西方向に、散発的に、次第に小起伏となって伸びている。シラス台地は並行して南流する中小の河川の活発な浸食作用によって深い谷で分断され、さらにその支流によって樹枝状に広がる谷頭浸食で細かく刻み込まれて、大小幾多の台地が形成され、谷底の低地とは急傾斜面や崖によって区切られている。町内を流れる河川は西側に延長24kmの安楽川が、東側を延長15kmの前川がそれぞれ南流しており、他に北東山間部の四浦地区には大矢取川が宮崎県串間市を経て志布志湾へ注ぎ込んでいる。又、これらの河川の中流域から下流域にかけては各所に大小の河岸段丘や谷底平野が形成されている。

このような地形のため、町内に分布する約180箇所の埋蔵文化財包蔵地の多くは、山稜に付随するそれぞれの山麓台地基部、あるいはその縁辺部に立地している。

今回発掘調査対象となった下田遺跡も、南那珂山系の最東端に位置する益倉山地の西側に、北東から南西へ、山並みと並行して流れる前川の深い谷で区切られた台地上に立地している。又、台地の南側は前川の支流である益倉川の谷で、北側は益倉山地から前川へ落ち込む小さなV字状の谷によって、それぞれ隣接台地とは隔絶されている。さらに台地上にも西側から二つの浅い谷が入込んでおり、台地全体が東側を基部に西へ三つ葉状に尾根が伸びた形状となっている。今回の調査で遺物の発見されたA地区は中央の尾根上に、B地区は最も広い南側の尾根上に立地していることになる。

以上、下田遺跡を包括する志布志町の自然環境を概観してみたが、この地方が気候温暖で湧水豊かな自然の恩恵を受けて、古代より連綿とした人々の営みが、繰り広げられていたことが偲ばれるものである。

第2節 周辺遺跡

ここでは、俗に“縄文銀座”と呼ばれる前川流域の中でも、特に今回調査した下田遺跡を中心とした前川中下流域の代表的な遺跡について紹介をしてみたい。

鎌石橋遺跡は、前川支流の谷底平野に小規模に発達した河岸段丘上に立地しており、昭和56年発掘調査が行われている。その調査結果は、鹿児島考古第16号に発表されているが縄文時代晩期及び前期の遺構遺物と共に、縄文時代草創期に比定される隆帯文土器や集石炉遺構が出土し重要な遺跡となっている。

鎌石遺跡は、平成元年土地改良事業に伴う確認調査で発見され、縄文早期の集石炉遺構、晩期の黒川式土器や筥目庄痕文土器、平安時代の須恵器や土師器の碗・杯・甕・焼塩壺等と共に、江戸時代の土墳墓2基から、人骨片と共に副葬品の六道浅各7枚が出土している。

西原A遺跡も、平成2年の土地改良事業に伴う確認調査で発見された遺跡で、縄文時代晩期の黒川式の土器と筥目庄痕文土器や石鏃、石匙、打製土掘り具、磨石、石皿、敲石、石錘、台石、凹石等の石器類と共に、土製勾玉、石製勾玉が出土している。

山之上遺跡は、前川と益倉川の合流地点の南側で、下田遺跡の立地する別府台地に隣接する石踊台地の北西隅の畑地に位置し、別府（石踊）遺跡の北側500mの地点に所在する。昭和42年3月に確認調査が実施され、その結果、敷石住居跡が発見され、縄文早期の塞ノ神式土器や石核なども出土している。

石踊遺跡は、昭和51年特農事業に伴う確認調査で遺跡の所在が確認され、その後、農道舗装部分の2400㎡について昭和52・53年に発掘調査が行われている。その結果、轟式、曾畑式をはじめ早期から晩期までの各時代の遺物が出土した。野久尾遺跡は昭和51・52年に発掘され、撚糸文、轟式、春日式の土器が出土している。中でも轟式土器は約5000点の出土遺物の約8割を占め、この土器型式の究明に重要な資料となった。小淵遺跡は、前川河口より700m付近の海岸段丘の南西で、前川との比高が14mの傾斜面に立地している。昭和42年8月に調査が実施され、その結果、縄文時代中期及び後期の土器が出土している。出土遺物は岩崎下層式、岩崎上層式、指宿式、市来式、草野式、石錘、扁平半磨製石器などである。又、この遺跡からは、中世山城志布志内城の石段や井戸等の遺構も確認されている。

上田屋敷遺跡は、昭和63年特農事業に伴い確認調査が実施されている。その結果、台地縁部の各トレンチから石坂式、吉田式、前平式、桑ノ丸式、入佐式、黒川式等の縄文土器と共に僅かに残存している弥生時代の遺物包含層から弥生時代の甕や石斧等が出土している。尚、この遺跡からは、昭和44年に弥生中期の山之口式の完形土器が採集されている。



第1図 下田遺跡の周辺遺跡図

第1表 周辺の遺跡一覧表

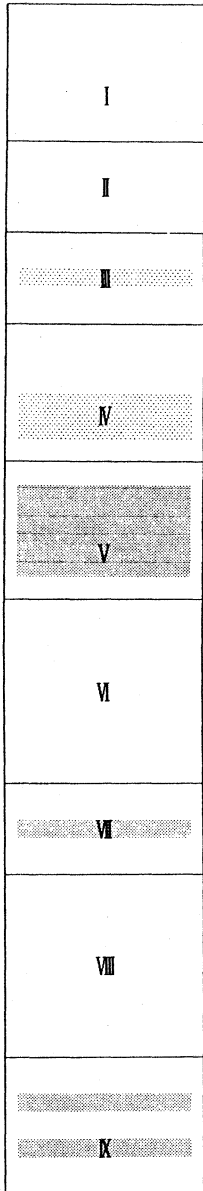
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	出土遺物等
1	潤ヶ野	帖上ノ原	台地	縄文(早・前・後晩)	前平式・轟式・岩崎上層式・擬縄文土器
2	出口A	〃 出口	沖積地	縄文・弥生	双角石器
3	出口B	〃 出口	台地	〃(早・晩)	前平式・塞ノ神式・三万田式・筵目圧痕文土器
4	家ヶ野	〃 天堤	台地	〃・弥生	指宿式・市来式・草野式
5	鎌石橋	〃 前畑	傾斜地	旧石器・縄文	細石核・細石刃・隆帯文土器
6	鎌石	〃 鎌石	台地	縄(早・晩) 平安江戸	吉田式・黒川式・須恵器・土師器(碗・杯・甕・焼塩壺)古銭
7	二反野	〃 二反野	台地	縄文・弥生	吉田式・石坂式・塞ノ神式・曾畑式・磨製石斧・磨石・石皿
8	西原	〃 西原	台地	縄文(晩)	黒川式・土製勾玉・石製勾玉・石鐵・石匙・打製土掘具・磨石・石皿
9	山之上	〃 石踊	台地	旧石器・縄文	石核・石坂式・塞ノ神式
10	別府石踊	〃 石踊	台地	縄文(早・前・中・晩)	吉田式・石坂式・塞ノ神式・轟式・曾畑式・岩崎式・黒川式
11	野久首	〃 野久首	鞍部	〃(早・前・晩)	轟式・曾畑式・春日式・指宿式・黒川式
12	小湫	〃 小湫	傾斜地	〃(中・晩) 弥生古墳	岩崎上下層式・指宿式・市来式・草野式・石錘・中世城郭遺構
13	飛渡	〃 飛渡	鞍部	〃(晩) 弥生・古墳	黒川式・孔列文土器・山之口式・石槍・石錘・円盤状石斧
14	鳥廻	〃 鳥廻	台地	〃(早)〃(中)	円筒系土器・集石
15	上田屋敷	〃 上田屋敷	台地	〃(晩)〃(中)	吉田式・石坂式・前平式・桑ノ丸式・入佐式・黒川式・山之口式

第3章 層位

下田遺跡の所在する別府上台地は、新生代古代三期の日南層郡が基盤となり、その上を、約22,000前の始良カルデラを起源とする入戸火砕流(シラス)が覆うかたちで形成され、さらに前途の通り、台地全体が三つ葉の尾根状になった地形のため、場所によって約2～4mの厚さで、以降の各時代の火山噴出物や腐食土壌(アンドソイル)が堆積している。

また、個人による基盤整備もかなり進んでおり、多量の盛土層が形成されている所や、耕作による攪乱を受けている場所も多い。

基本となる層序は第2図の通りであるが、場所によってはより細分されるところもある。



I層 茶褐色土

耕作土で、色調・硬さにより2層(a, b)に細分できる。

II層 明黒褐色土

緻密な砂質の腐植土壌で、やや硬質である。

III層 黄褐色土

霧島御池を起源と考えられる黄白色火山灰を全面ゴマ塩状に含む硬質土層である。

IV層 黒褐色土

下部に池田カルデラ起源と考えられる黄白色軽石(3～20mm)を混入する層で、場所によって硬質となっている所もある。

V層 黄橙色火山灰土

鬼界カルデラを起源とする赤ホヤ火山灰(約6,300年前)である下部は砂粒状の軽石が堆積している。

VI層 暗茶褐色土

縄文早期の遺物含有層である。硬質で、色調により(a, a', b)の3層に細分できる所もある。VI a'層は二次サツマか?

VII層 暗茶白色火山灰土

桜島を起源とするサツマ火山灰層(約11,000年前)であるが、ここでは全域ブロック状か二次堆積状に汚れている。

VIII層 茶褐色粘土質土

場所によって色調硬さによって数層に細分できる。

IX層 暗黄灰色火山灰層

ヌレシラスと呼ばれ、色調硬さによって数層に細分でき、黄白色軽石の混じる所もある。22,000年前の入戸火砕流に比定される。

第2図 基本層序

第4章 調査の概要

第1節 調査の概要

下田遺跡の立地する別府上台地は、東から西へ三列の尾根状起伏とその間の浅い谷部で構成され、南側の尾根状台地先端部一帯が周知の遺跡として知られ、遺物の散布がみられる。

確認調査は、事業計画区域となるこの台地全体に渡り、遺跡の範囲・性格等を把握するため、地形などを考慮して、工事により削平される部分や道路に計画されている部分を中心として、2×4mを基本とするトレンチ10か所を設定して行った。

調査の結果、第4図に示す第1トレンチから層序により縄文時代早期に該当する集石遺構が、また第10トレンチⅥ層より縄文時代早期の土器片が出土している。なお、10トレンチ付近では表採資料も数点見られた為、この一帯の対応を重点的に検討した。

第2節 各トレンチの調査

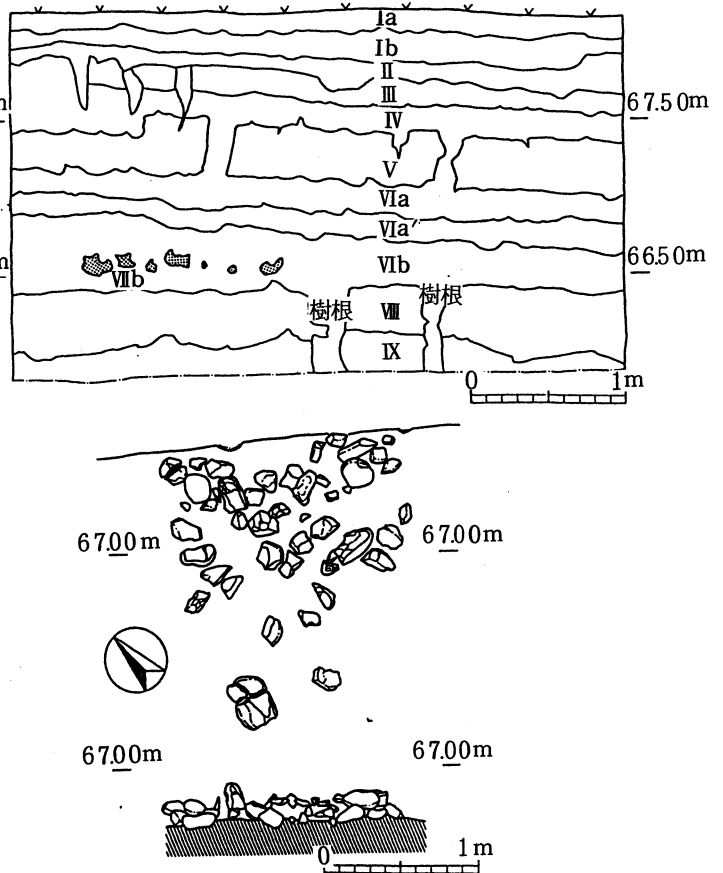
第1トレンチ

調査区北端標高約68m平坦地の芝畑に2×4mの大きさで設定した。

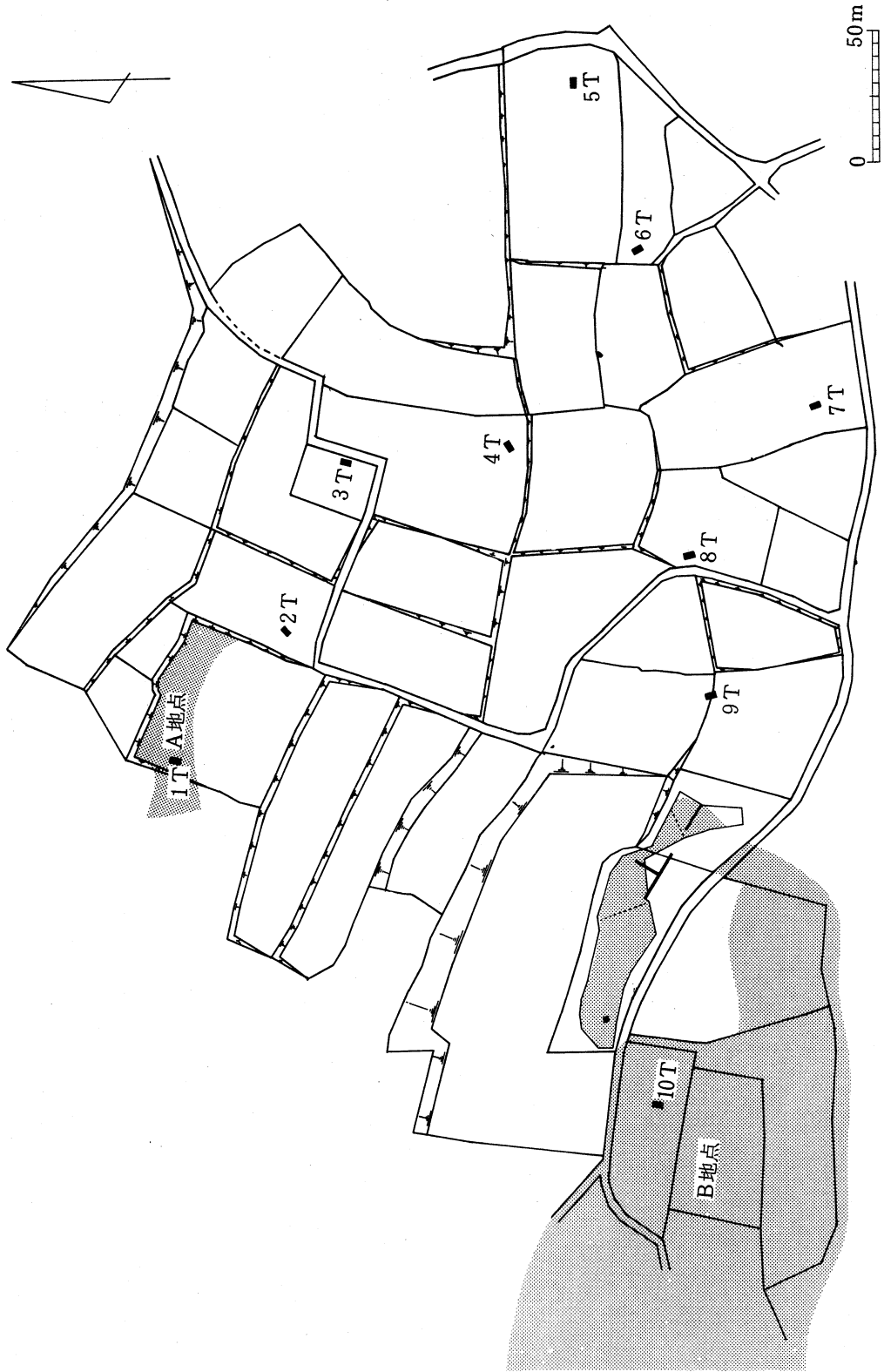
層位はほぼ基本層序であったが、I～II層は個人による農地造成による攪乱層である。また一部層によっては樹根等による攪乱も観察された。

薩摩Ⅵa'の二次堆積(?)が観察され、トレンチ北側のⅥb層上面で集石遺構が検出された。土器が相伴していないが層位から縄文早期の集石遺構と思われる。

ほとんどが角礫であり、砂岩である。火を受けたものと考えられ、若干赤味を帯びている。明確な堀込みは確認できなかった。



第3図 下田遺跡1トレンチ土層断面図及び集石出土状況



第4図 下田遺跡トレンチ配置図 (施工前)

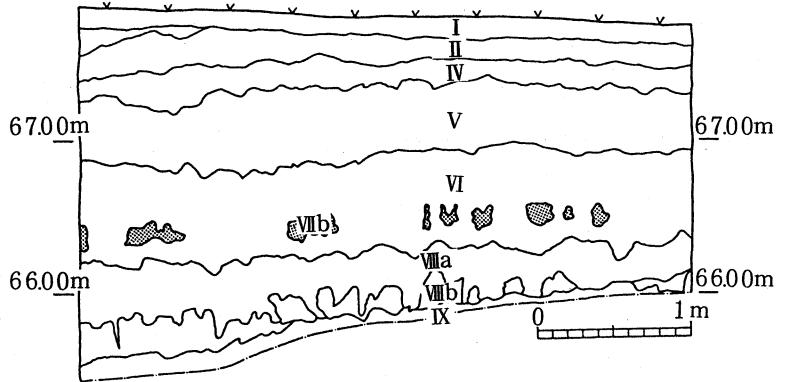


第5図 下田遺跡トレンチ配置図 (施工後)

第2トレンチ

調査区北北東標高約68mの傾斜地の畑で、1トレンチの東南60mに位置する地点に2×4mの大きさで設定した。

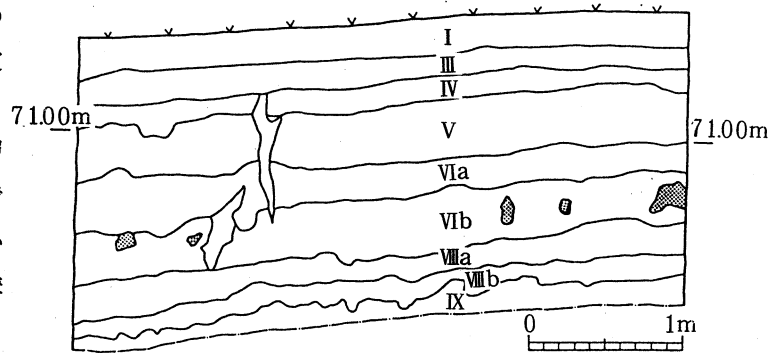
ほぼ基本層序であるが、Ⅲ層は確認されず、傾斜地であるため、Ⅵ層とⅦ層を明確に細分できなかった。遺物・遺構は、確認されなかった。



第3トレンチ

調査区北東標高約72mの微高地で、2トレンチの東南70mの地点に2×4mの大きさで設定した。

I層から下はⅢ層となりⅡ層は確認されなかった。傾斜地であるためⅦ層はブロックでしか観察できなかった。遺物・遺構は、確認されなかった。

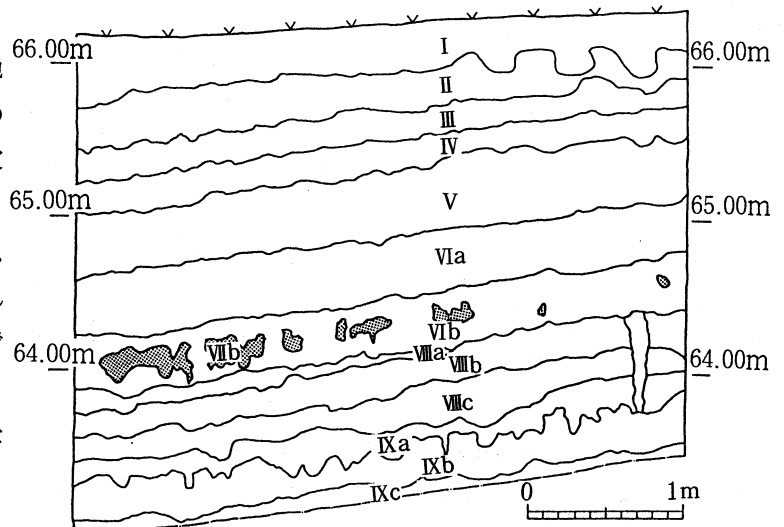


第4トレンチ

調査区東標高約66mの傾斜地の畑で、3トレンチの南60mの地点に2×4mの大きさで設定した。

ほぼ基本層序であるが、Ⅷ層、Ⅸ層は色調・硬さ等によりそれぞれa、b、cの3層に細分できた。

遺物・遺構などは確認されなかった。

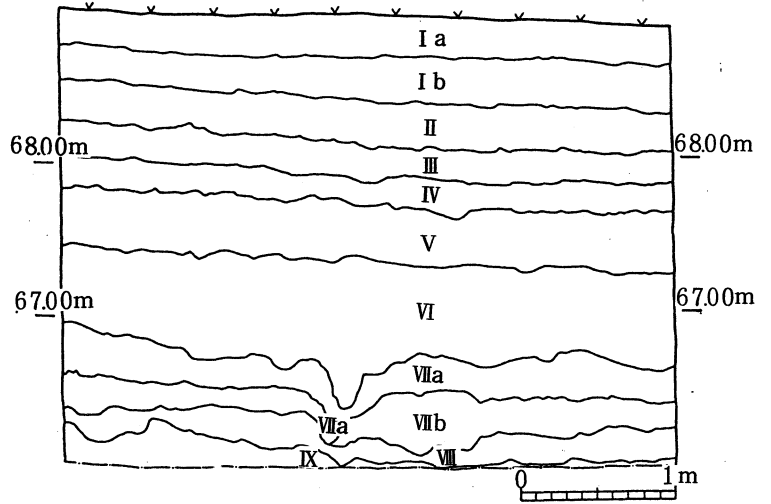


第6図 下田遺跡2、3、4トレンチ土層断面図

第5トレンチ

5トレンチ調査区東端標高約69mの畑地で、4トレンチの東140mの地点に2×4mの大きさで設定した。

層位はほぼ基本層序であるがⅥ層の遺物包含は細分できなかった。また、Ⅶ層の薩摩ブロックは確認されなかった。遺物・遺構などは確認されなかった。

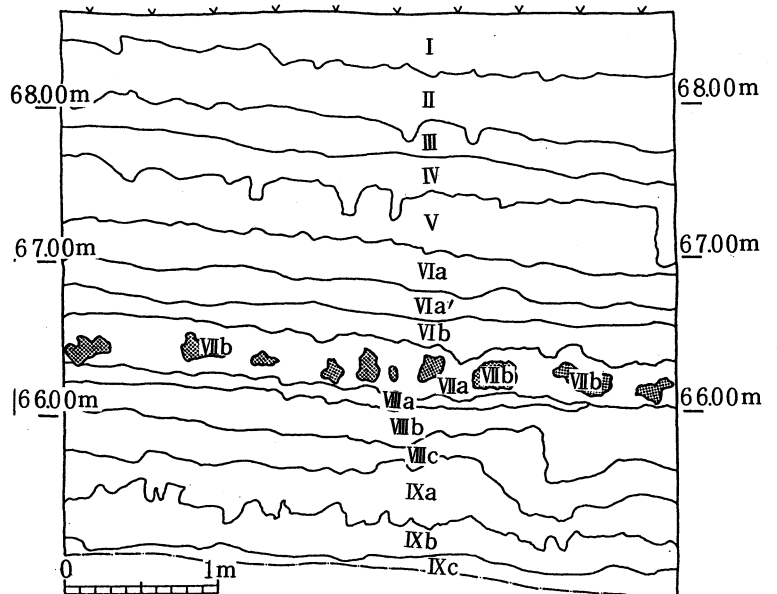


第6トレンチ

調査区東南標高約68mの畑で、5トレンチの西70mの地点に2×4mの大きさで設定した。

層位はほぼ基本層序である。Ⅵa層の遺物包含層は非常に硬質であり、Ⅵa'層の薩摩の二次堆積が観察された。

Ⅷ層、Ⅸ層はそれぞれ色調・硬さ等によりa、b、cの3層に細分された。遺物・遺構などは確認されなかった。

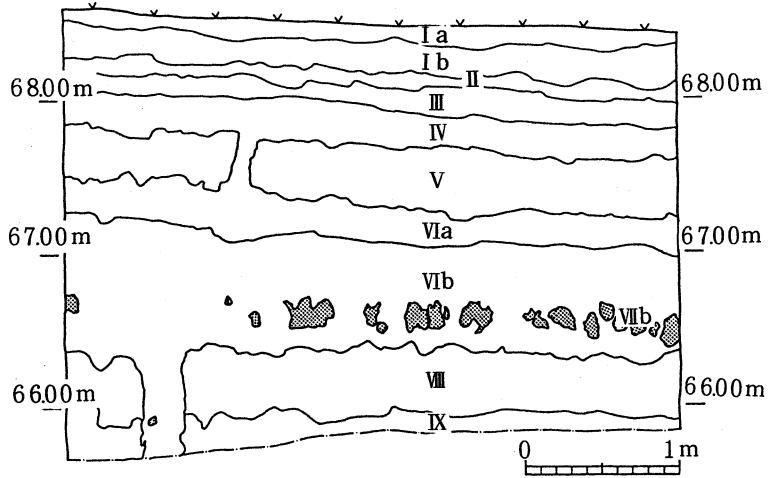


第7図 5.6トレンチ土層断面図

第7トレンチ

調査区南南東標高約67mの傾斜地の畑で、6トレンチの南西90mの地点に2×4mの大きさに設定した。

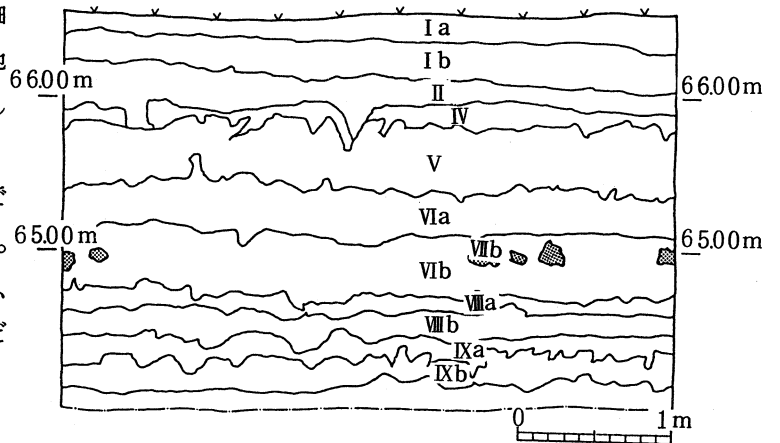
層位はほぼ基本層序である。Ⅵa層の遺物包含層は非常に硬質であった。Ⅷ層からⅩ層にかけては、樹根と思われる攪乱が観察された。Ⅵ層でも樹根(?)と思われる攪乱が観察され、Ⅶb層が落ち込んでいた。遺物・遺構などは確認されなかった。



第8トレンチ

調査区南南東標高約69mの畑で、7トレンチの北西80mの地点に2×4mの大きさに設定した。

I層およびII層は、攪乱層である。III層は確認されなかった。Ⅹ層は色調などにより、a、b、cに細分した。遺物・遺構などは確認されなかった。

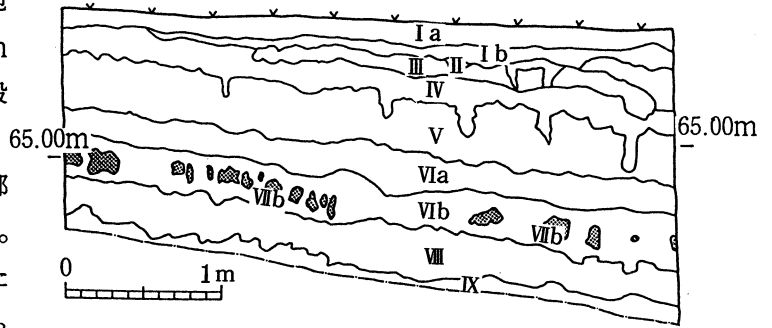


第8図 7.8トレンチ土層断面図

第9トレンチ

調査区南標高約66mの傾斜地の畑で、8トレンチの南西50mの地点に2×4mの大きさで設定した。

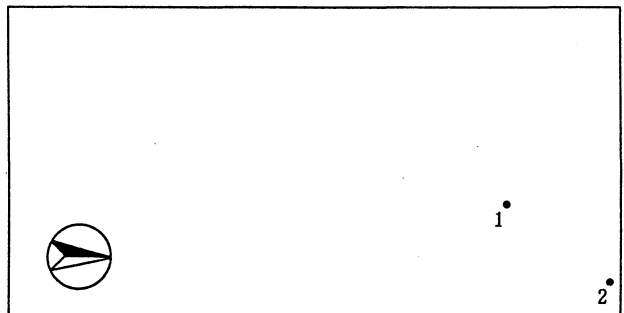
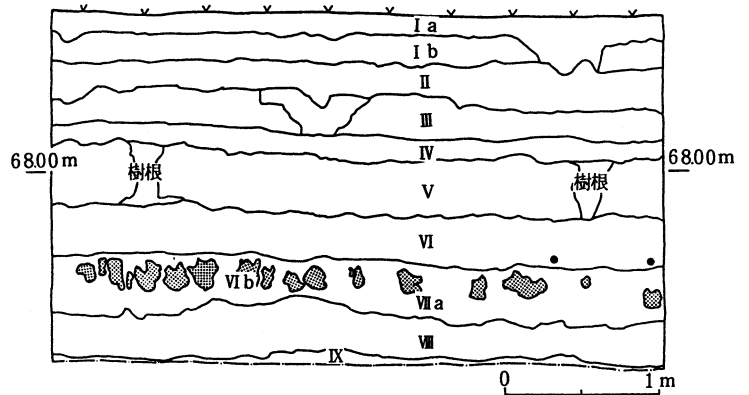
ほぼ基本層序であるが、一部攪乱の観察されることもある。Ⅵ層の遺物包含層は確認されたが遺物・遺構は観察されなかった。



第10トレンチ

調査区南西標高約69mの畑で、9トレンチの西160mの地点に2×4mの大きさで設定した。

ほぼ基本層序であるが、Ⅲ～Ⅳ層は樹根による攪乱が観察された。Ⅵ層より早期土器片が2点が出土した。1は、胴部の細片である。器壁は薄い。縦位に網目状撚糸文を施すものである。色調は茶褐色であり、焼成も良好である。2は、摩滅の著しい破片である。上位が、若干肥厚するもので、施文は、数条の沈線を横位に施す。



第9図 下田遺跡9.10トレンチ土層断面図及び平面図



第10図 10トレンチ出土土器実測図

第3節 下田遺跡B地区の緊急発掘調査

下田遺跡の確認調査によって遺物の出土を見た地点の取扱いについては、事業主体者である大隅耕地事務所・町耕地課等の現場担当者との現地協議により、次のように対応することとなった。

その結果、A地区については設計変更によって遺跡は現地保存されることとなった。しかし、B地区については設計変更が困難であるため、最低限の削平部分について引き続いて緊急発掘調査を実施することとなった。

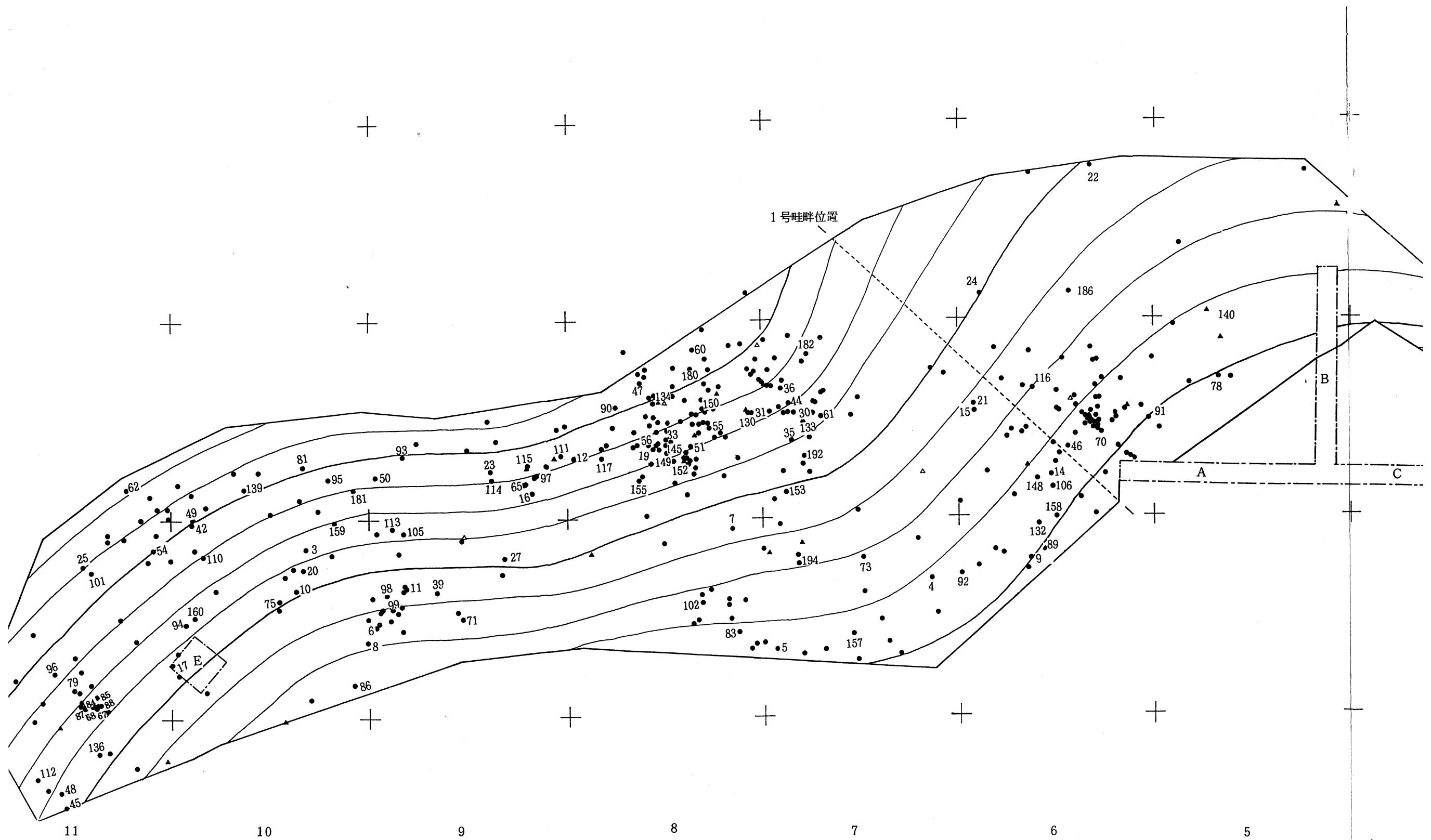
調査はまず遺跡の範囲を確認するため、現況地形を考慮してA～Eの試掘トレンチを設定した。その結果、A～C試掘トレンチについては、トレンチ端に遺物包含層は残存していたが、遺物の出土は認められなかった。D、Eについては、遺物包含層および遺物の出土が認められた。そこで第11図に示す区域については、東西方向に1～1.2南北方向にA～Dの10×10mグリッド設定し、緊急発掘調査を行うこととなった。

調査区は、南東側の台地中央部側については耕作によって削平をうけており、遺物包含層は北西側に向かって緩やかに傾斜し、その先は、以前の個人による造成によって削平を受け、下段の圃場と継続していなかった。

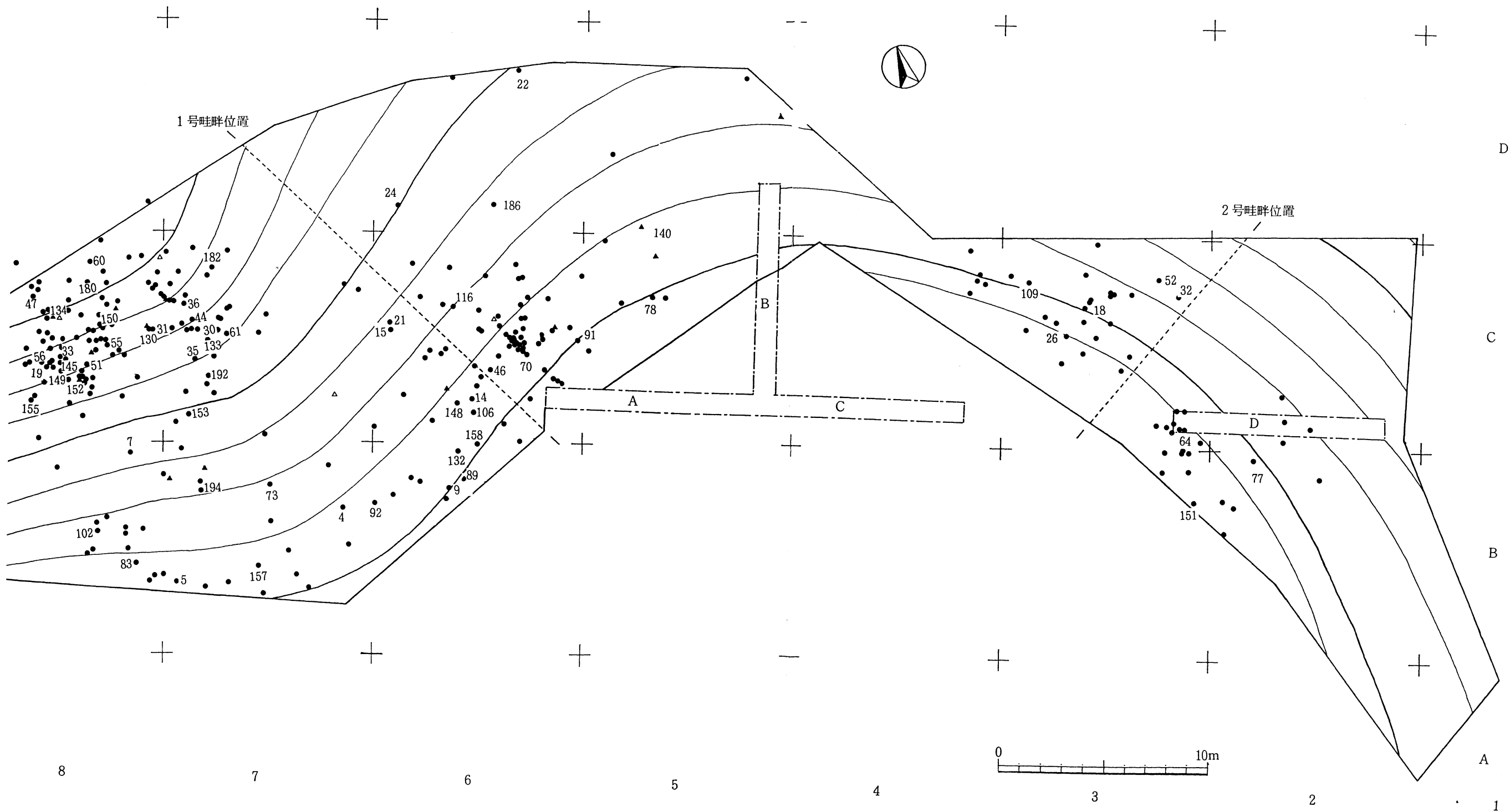
I～V層に関しては、重機による表土剥ぎを行い、VI層の遺物包含層は人力で掘り下げた。

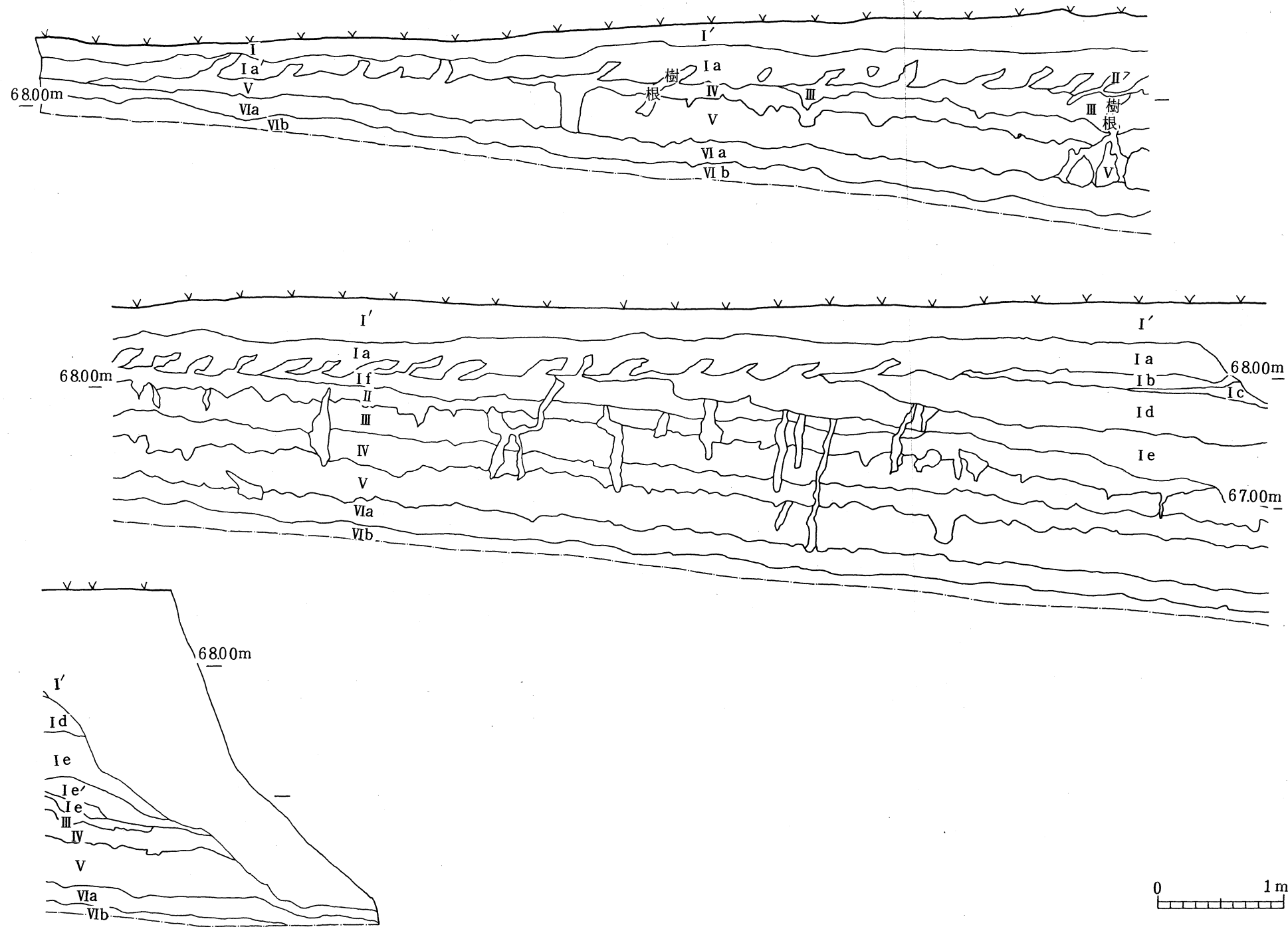
層位は、I～III層は耕作などによる攪乱層であり、場所によっては耕作機械（リッパー）の爪跡が残る。VI層は、遺物包含層である暗茶褐色硬質土層のVI a層と茶褐色硬質土層のVI b層の2層に細分され、VI b層が最終検出面である。

調査区は傾斜していることもあって、遺構は確認されなかったが、縄文早期末の塞ノ神式土器の出土を見た。また、最近注目されている塞ノ神式土器に伴う壺形土器および耳栓が出土した。

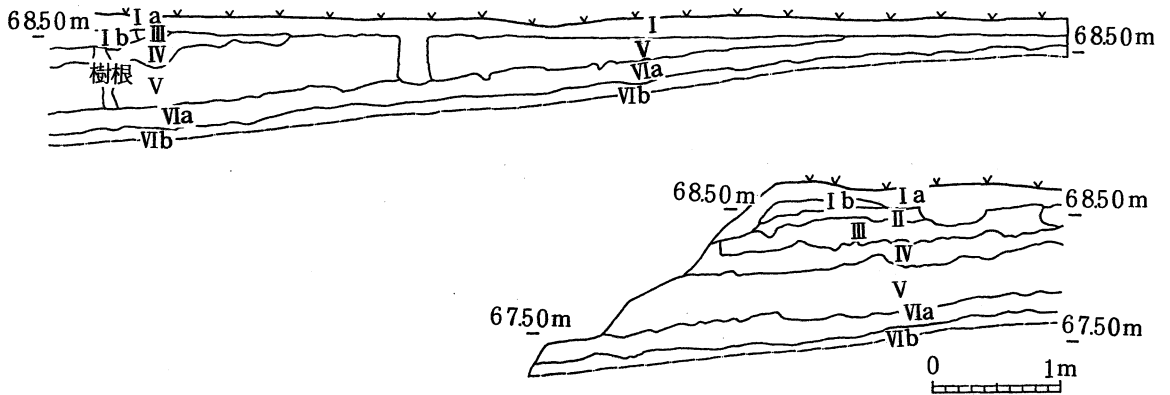


第11図 B地区遺物出土状況及びグリッド設定図・発掘区地形図





第12图 B地区1号哇畔土层断面图



第13図 B地区2号畦畔土層断面図

第4節 出土遺物

1. 土器

(1) 出土土器の形態分類

出土土器は、形態の特徴から便宜的にⅠ～Ⅵ類土器の6種類に区分することとした。

第Ⅰ類土器（第14図-3）

円筒形の胴部に綾杉文を丁寧に施すものである。

第Ⅱ類土器（第14図～第15図-4～13）

口縁部が若干内湾気味になるものである。口唇部は平縁であるが若干内傾し、胴部はほぼ円筒形となるものである。施文は、櫛描きの流水文及び羽状文である。

第Ⅲ類土器（第15図-14）

胴部が「く」の字に屈曲するものである。

第Ⅳ類土器（第15図-15）

頸部の屈曲部に突帯文状に盛り上げ、刻目を施し、刺突連点文を施すもの。

第Ⅴ類土器（第16図～第33図-16～179）

Ⅴ類土器は、口縁部がラップ状に開くものであり、胴部はほぼ円筒形を呈し、底部は上げ底気味の平底である。施文は燃糸文、幾何学凹線文、刺突連点文、刻目文などである。この遺跡の中心を占めるもので多彩なバリエーションがあり、数量も多い。器形上、深鉢形（1）と壺形（2）に分けられる。

(1) 深鉢形

口縁部に特徴が認められ、(a) 口縁部がラップ状に開くラップ状口縁と (b) 外反する口縁の端部がキャリパー状に屈曲する屈曲口縁の2通りの形態を認めることができる。さらに、それぞれは施文に若干のバリエーションが認められる。

また、胴部は器形はほぼ円筒形であり、形態を分けることはできないが、施文に若干のバリエーションが認められる。尚、底部については一括して説明する。

(2) 壺形

細部に若干のバリエーションが認められ、便宜的に a~d に細分した。

第Ⅵ類土器 (第34図~第35図-180~195)

凹線の区画内に燃糸文および刺突連点文を施すものである。

(2) 第Ⅰ類土器 (第14図-3)

3は、胴部破片で、器壁は12mmである。胎土には長石・角閃石と比較的大きな小礫も含むが、内面は丁寧なナデ調整で、焼成も良好である。色調は黄褐色である。丁寧な綾杉文が施されている。

(3) 第Ⅱ類土器 (第14図~第15図-4~13)

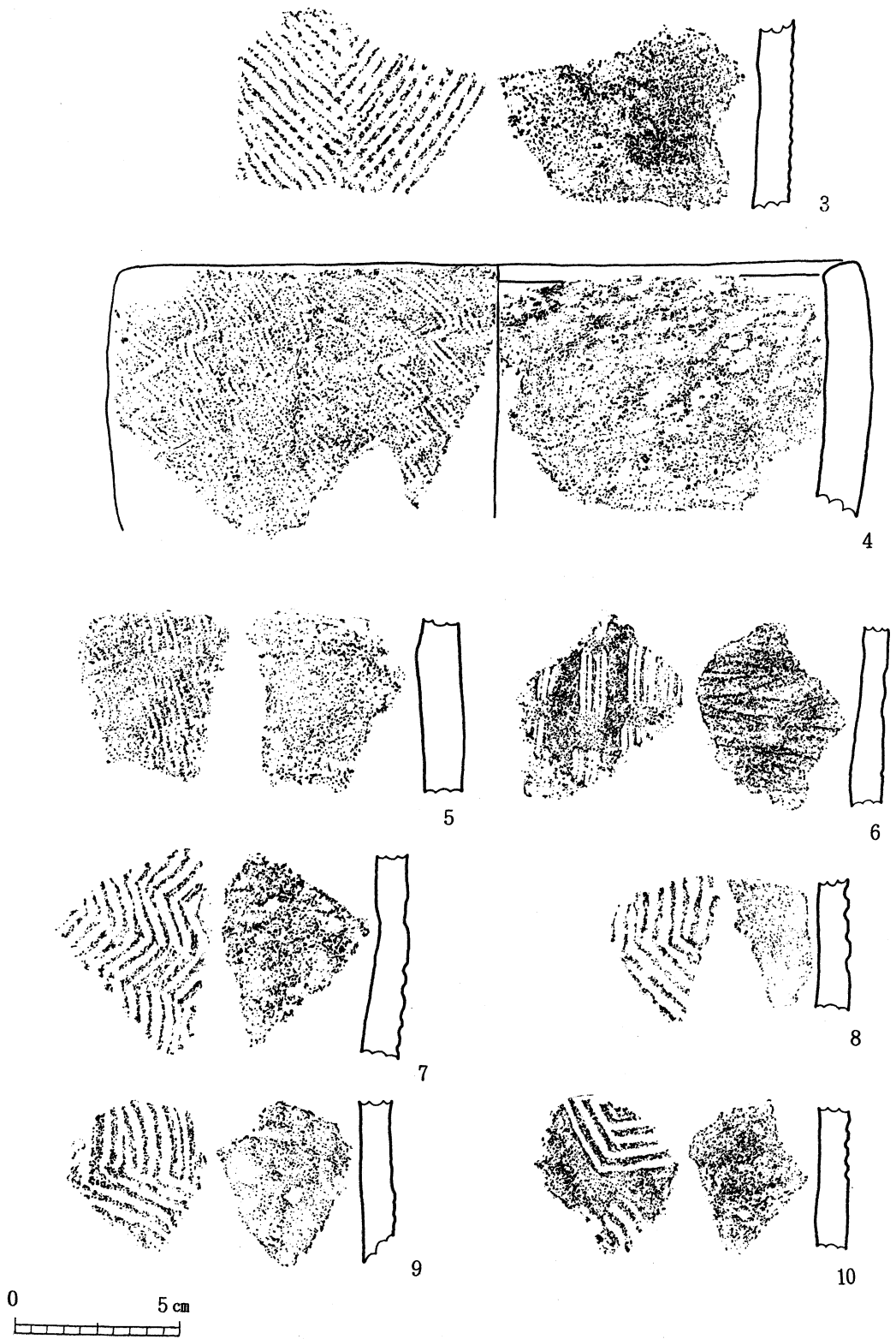
4は、口縁部から胴部にかけての破片で形態を窺える唯一のものである。口縁部が内湾気味であるが、胴部は円筒形を呈するようである。口唇部は平縁で内傾する。器壁は13mmある。胎土には角閃石・長石・石英と小礫を含む。色調は明茶褐色である。施文は5mm単位の丁寧な櫛描きの流水文が施されている。5は、櫛描きの流水文であるが、やや荒い。6~12は、羽状の櫛描きを施すものである。6は、内面はヘラ状の工具による荒い調整が施されている。7は、丁寧な羽状の櫛描きであるが、9、10は荒い感じに施され、焼成・胎土が類似している。11~12も焼成・胎土が類似している。

第Ⅲ類土器 (第15図-14)

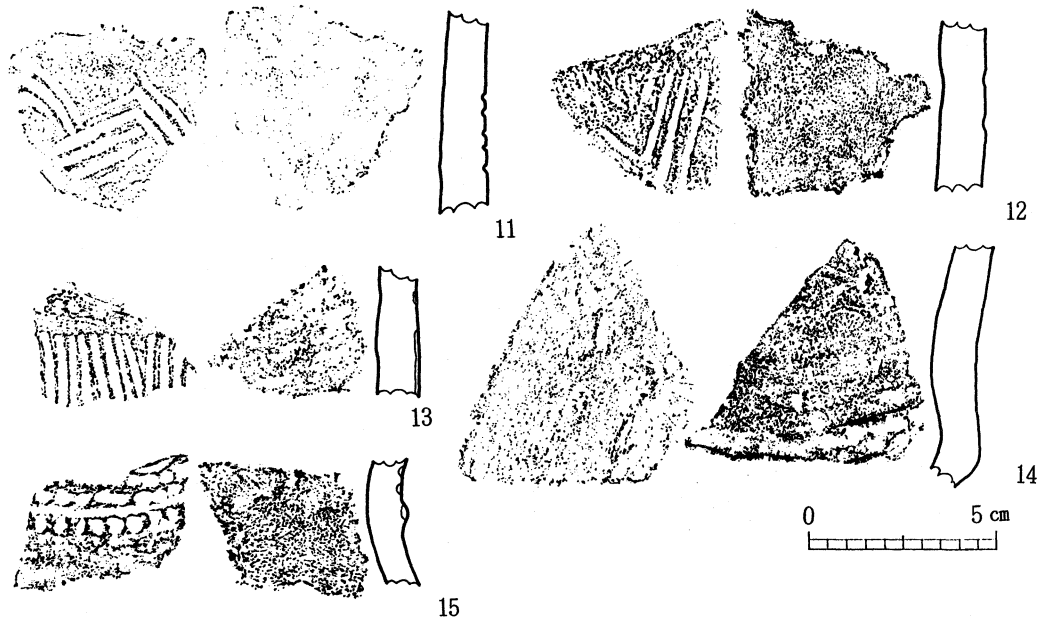
14は、胴部破片である。「く」の字に屈曲するもので、無文で色調は淡茶褐色である。

第Ⅳ類土器 (第15図-15)

15は、頸部破片である。屈曲部に突帯状に盛り上げ、刻目を施し、屈曲部下端に刺突連点文を2条巡らす。色調は茶褐色で、金雲母を含む。



第14图 I~II类土器实测图



第15図 II～IV類土器実測図

第V類土器（第16図～第33図—16～179）

口縁部がラッパ状に開くもので、胴部はほぼ円筒形を呈し、底部は上げ底気味の平底である。施文は、幾何学凹線文、刺突連点文、撚糸文などで文様構成をする。本遺跡の主体を占めるもので、多彩なバリエーションがあり、数量も多い。器形上、深鉢形（1）と壺形（2）に分けられる。

（1）深鉢形

①口縁部（第16図～第20図—16～79）

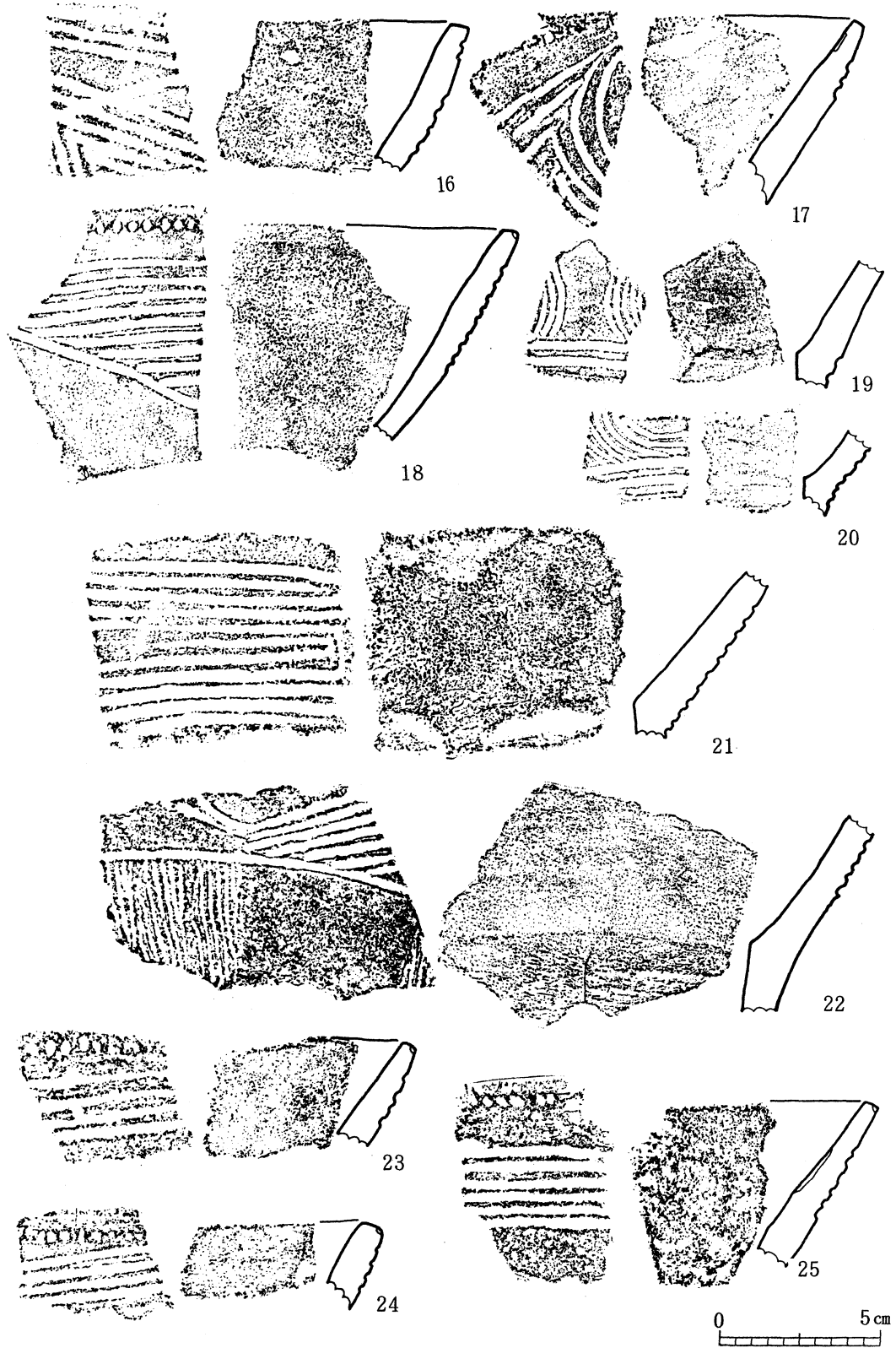
深鉢は、口縁部に特徴が認められ、（a）ラッパ状に開くラッパ状口縁と（b）外反する口縁の端部がキャリパー状に屈曲する屈曲口縁の2通りの形態を認めることができる。さらに、それぞれは施文に若干のバリエーションが認められる。

また、胴部は器形はほぼ円筒形であり、形態を分けることはできないが、施文に若干のバリエーションが認められる。尚、底部については一括して説明する。

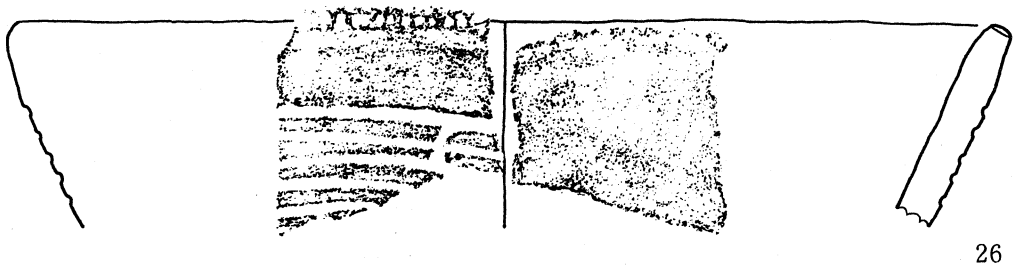
a（16～58）ラッパ状に外反するもの。

口唇部は、平坦面をつくるものと、若干丸くおさめるものがある。この口唇部には、丁寧な刻目あるいは刻線を施すものが一般的である。また、屈曲部外面は不明瞭なものが一般的であるが、内面は明瞭なものと不明瞭なものに認められる。口縁部の外面に施される文様は若干のバリエーションが認められる。

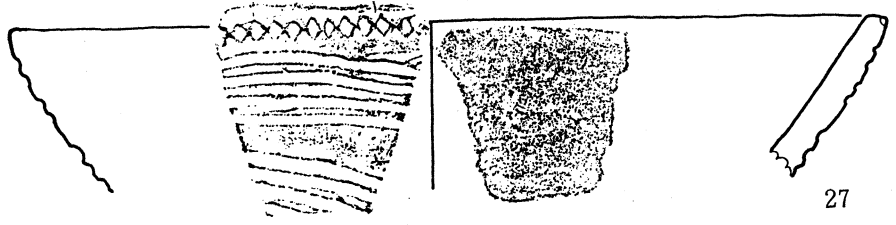
16は、若干内湾気味に外反する口縁部に幾何学文を施すものであり、17は、外反する口縁部



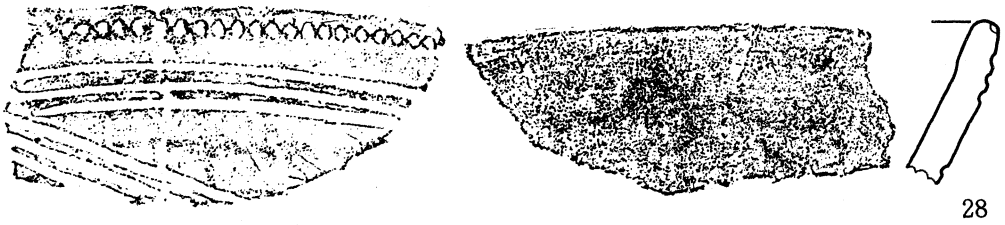
第16圖 V類土器実測圖(1)



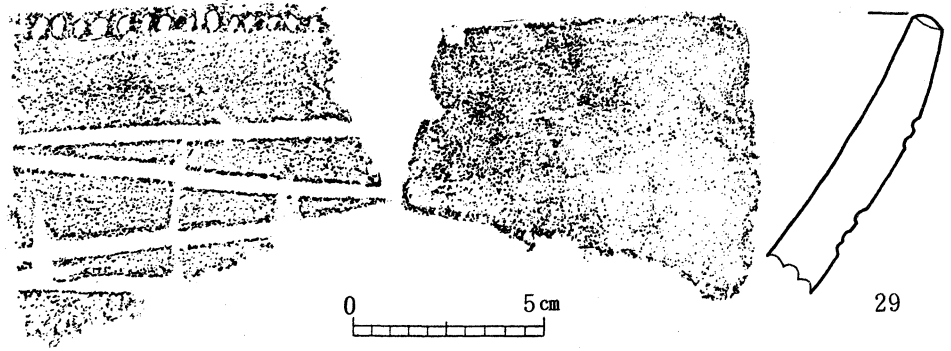
26



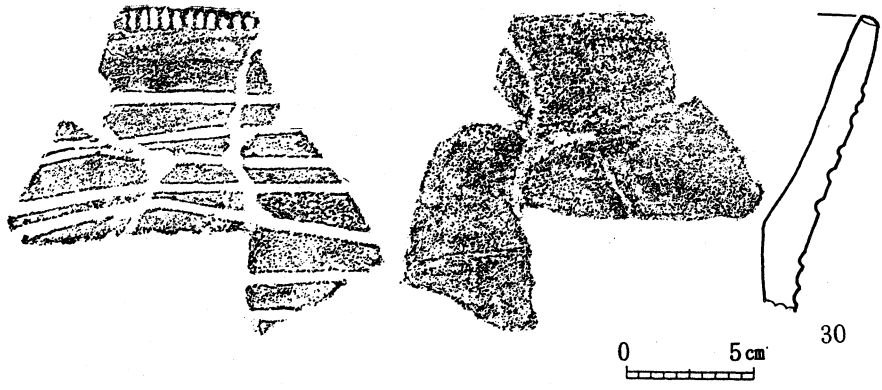
27



28



29



30

第17圖 V類土器実測図(2)

に幾何学文を施すもので、17・18は口唇部に刻目を施さない。18は、口唇部端に刻目を施し、斜位と多条の横位の凹線文で、幾何学文を構成するもので、器壁は薄く、丁寧なナデ調整である。19・20は、屈曲部の稜線が明瞭で、そこに2～3条の凹線文を巡らし、口縁部外面には凹線により弧状の曲線文を施すものである。それぞれ磨き調整であり、焼成も良好である。21は、多条の横位による凹線文を縦位の凹線文で結ぶものである。22は、屈曲部内面の稜線が明瞭なもので、口縁部外面には凹線文による幾何学文を施し、14mm単位の捺糸文を東にして施すもので、捺糸文帯は口縁部の文様部分にまで達する。23・24は、口縁部外面に4～6条の凹線文を横位か斜位に施すもので、23・24は摩滅している。25は、4条の凹線文を斜位に施し、口唇部は平坦である。

26は、口唇部に刻目を施し、口縁部に横位の凹線文を数条巡らし、凹線文の1本目と3本目を弧状に結ぶもので、若干摩滅している。27は、口唇部に丁寧な刻目を施し、4条単位の凹線文を横位および斜位に施す。色調は茶褐色である。28は、若干内湾気味に外反する口縁で、口唇部に丁寧な刻目を施し、口縁部に3条単位の凹線文を横位および斜位に施すもので、丁寧なナデ調整であり、焼成も良好である。

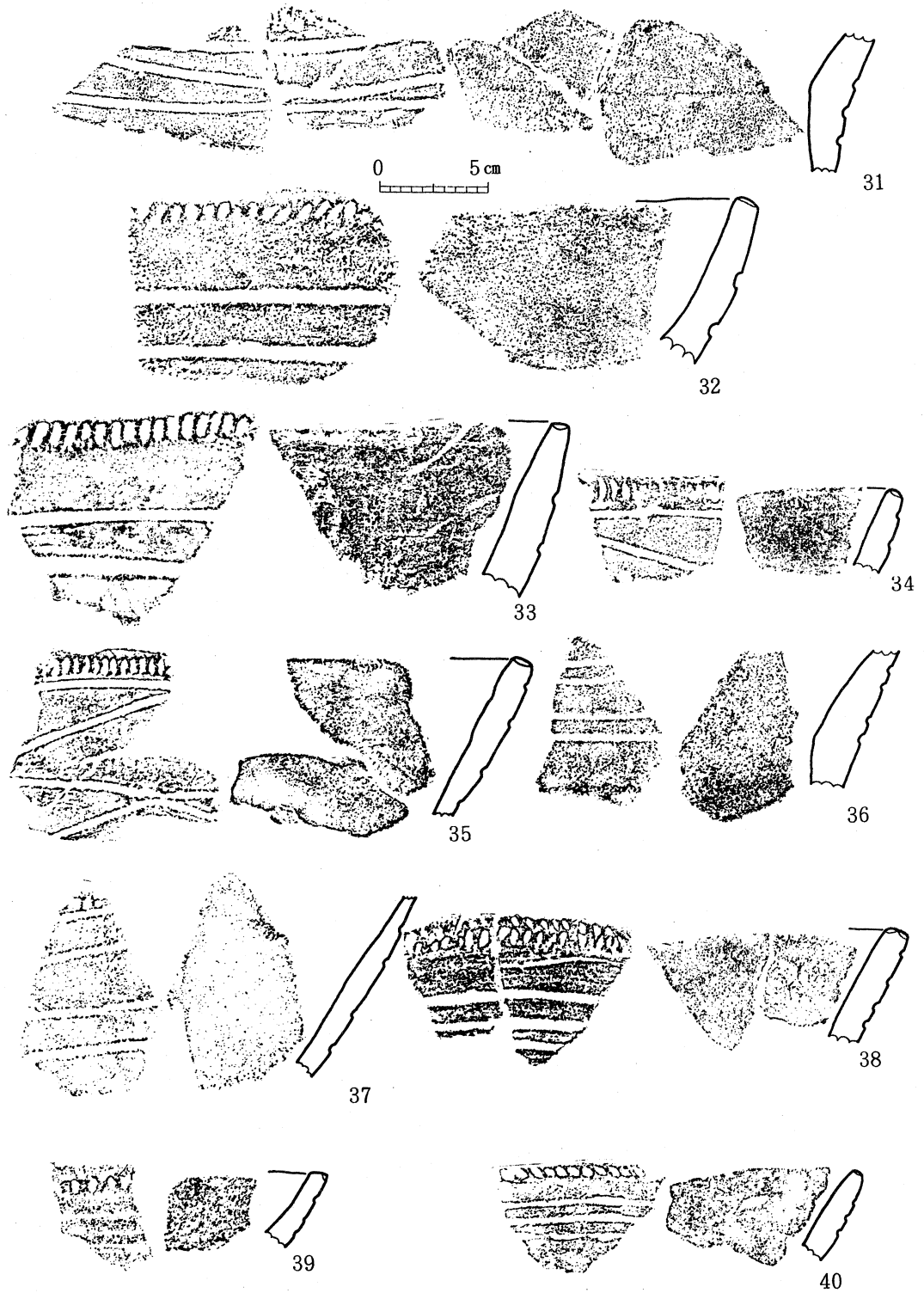
29～35は、口唇部に丁寧な刻目を口唇部全面に施し、凹線文で横位あるいは斜位に巡らし、幾何学的に文様構成をするもので、太形凹線文(29～33)と細形凹線文(34～35)がある。29～33は、若干厚手であるが焼成は良好である。30・31は、屈曲部内面稜線は明瞭である。

36～40は、口唇部に刻目を施し、凹線文を横位に巡らし、単純な文様構成をするもので、器壁は薄手である。36・37は、浅い平行凹線文を横位に施すもので、38～40は、浅い3条の凹線文を横位に巡らすもので、38は、口唇部に羽状の刻目を施す。口縁部外面にはススが付着している。39は、口唇部外端に刻目を施すが、40は口唇部に刻線を施す。

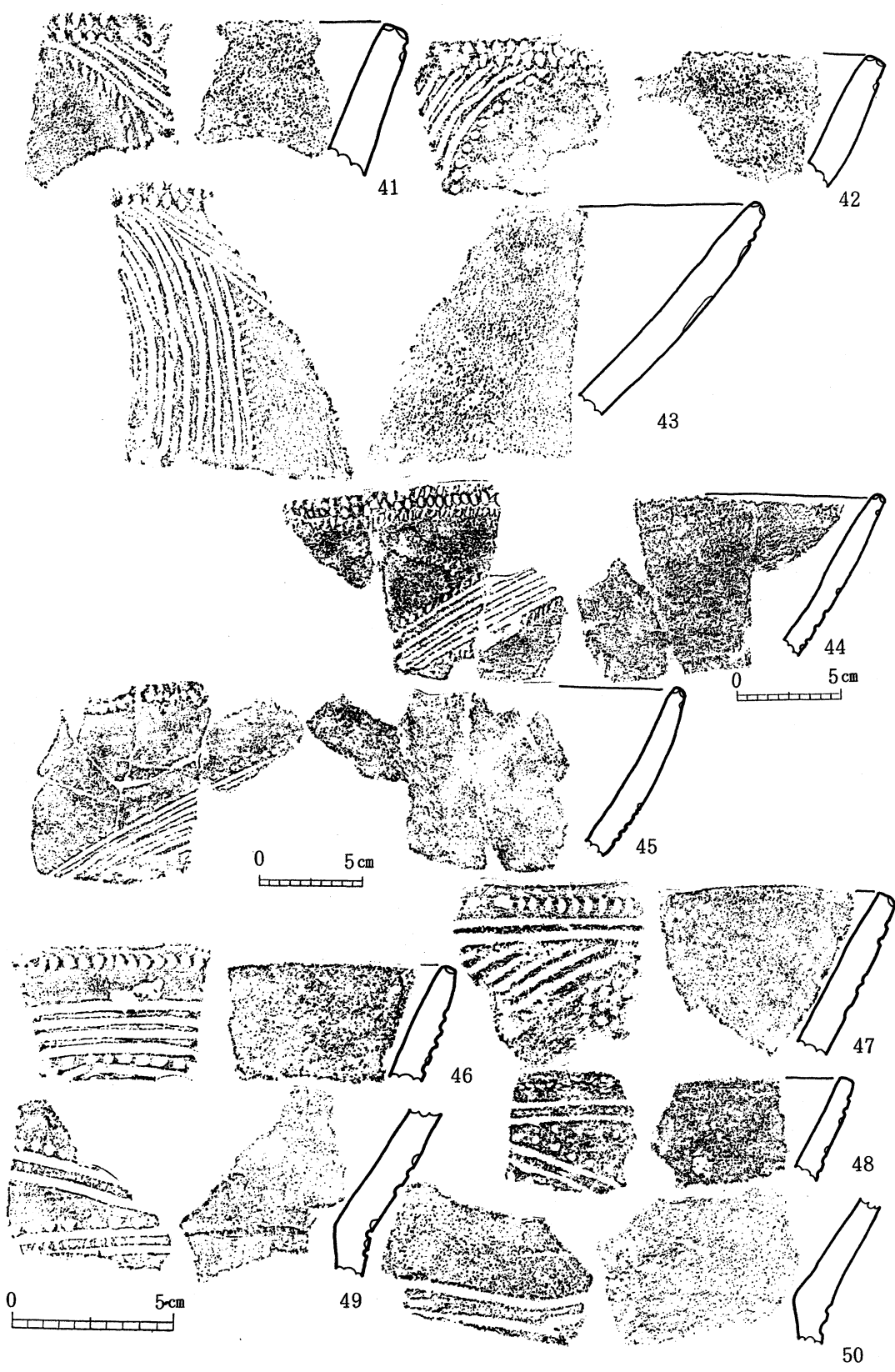
41～49は、凹線文の上位あるいは下位に刺突連点文を施すもので、刺突連点文は凹線文帯の上下位に施すものが一般的であるが、刺突連点文単独で文様構成するものもある。刺突連点文は、断面U字状(42・46・47・48・49)ものと断面V字状(41・43・44)が認められる。45はどちらとも施す。

41～43は、口唇部両端に丁寧な刻目を施し、弧状に数条の凹線文を施し、弧状の凹線文に沿うように刺突連点文を施す。44・45は、口唇部両端に刻目を施し、斜位の数条の凹線文の上位および下位に刺突連点文を施すものであるが、口唇部直下にも刺突連点文を施す。それぞれ、ススが付着している。46は、若干外反する口縁部で、4条の凹線文を横位に施し、凹線文帯の下位に刺突連点文を施す。47は、口唇部外端に刻目を施し、平行凹線文を巡らし、斜状の凹線文で、幾何学文を構成するもので、刺突連点文を単独に施す。48・49は、横位あるいは斜位に平行凹線文を施し、その上下位に刺突連点文を施す。48は、器壁は薄く摩滅している。49は、外反する口縁部で、口唇部は剥落しているが、屈曲部の稜線は明瞭である。屈曲部下位には、捺糸文が認められる。

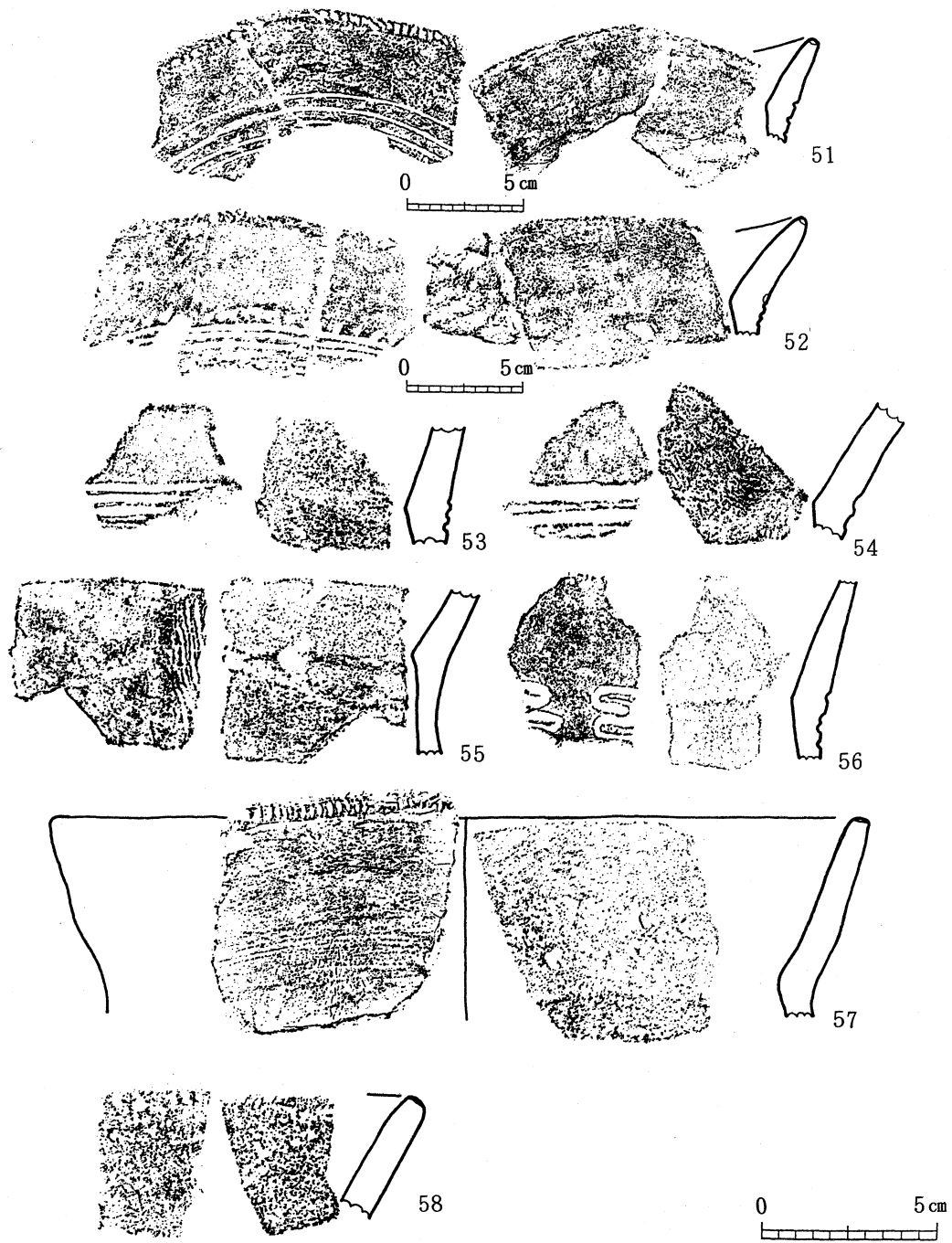
50～58は、口唇部に刻目を施すだけで無文のものであるが、頸部には文様を施すようである。50は、浅い凹線を横位に施し、51は、波状口縁となるもので、口唇部に刻線を施し、4条の浅



第18图 V類土器実測図(3)



第19図 V類土器実測図(4)



第20図 V類土器実測図(5)

い凹線を横位に巡らせるものである。52は、3条の凹線文を横位に巡らし、凹線文の上位に刺突連点文を施すが、刺突連点文は繁雑である。53・54は、2～3条の凹線文を施すものである。55は、縦位に撚糸文を施すもので、口縁部の文様部分にまで達している。56は、平行凹線文の上と下を弧状に結んで文様を構成するもので、磨き調整で焼成も良好である。57、58は、無文の口縁部であり、57は丁寧なナデ調整である。

b (59～79) 外反する口縁の端部がキャリパー状に屈曲するものである。口縁部は、波状口縁になるものと、平縁口縁の両方が認められる。口唇部は、平坦面をつくるものと、若干丸くおさめるものがある。この口唇部および屈曲部には、刻目を施すのが一般的であるが、中には屈曲部に刻目を施さないものもある。口縁部の外面に施される文様は、若干バリエーションが認められる。

59～73は、凹線文を幾何学的に施すものである。59は、口縁部が波状となるもので、口唇部と屈曲部に丁寧な刻目を施し、口縁部外面に4～5条の凹線文を幾何学的に施すもので、4条の凹線文帯と5条の凹線文帯を山形につなぐ部分が認められる。60は、口唇部が若干内傾するもので、屈曲部直下に横位の凹線文を巡らす。61・62は、屈曲部上位に4条の凹線文を施し、屈曲部下位に凹線による幾何学文を施すが、61は、波状の凹線文を縦位に施す。63は、屈曲部上位に浅い凹線文を施し、64は、口縁部端がやや肥厚するものである。67・68は、口唇部端には刻目を施し、屈曲部外面の稜線には、断面U字状の刺突連点文の刻目を施す。

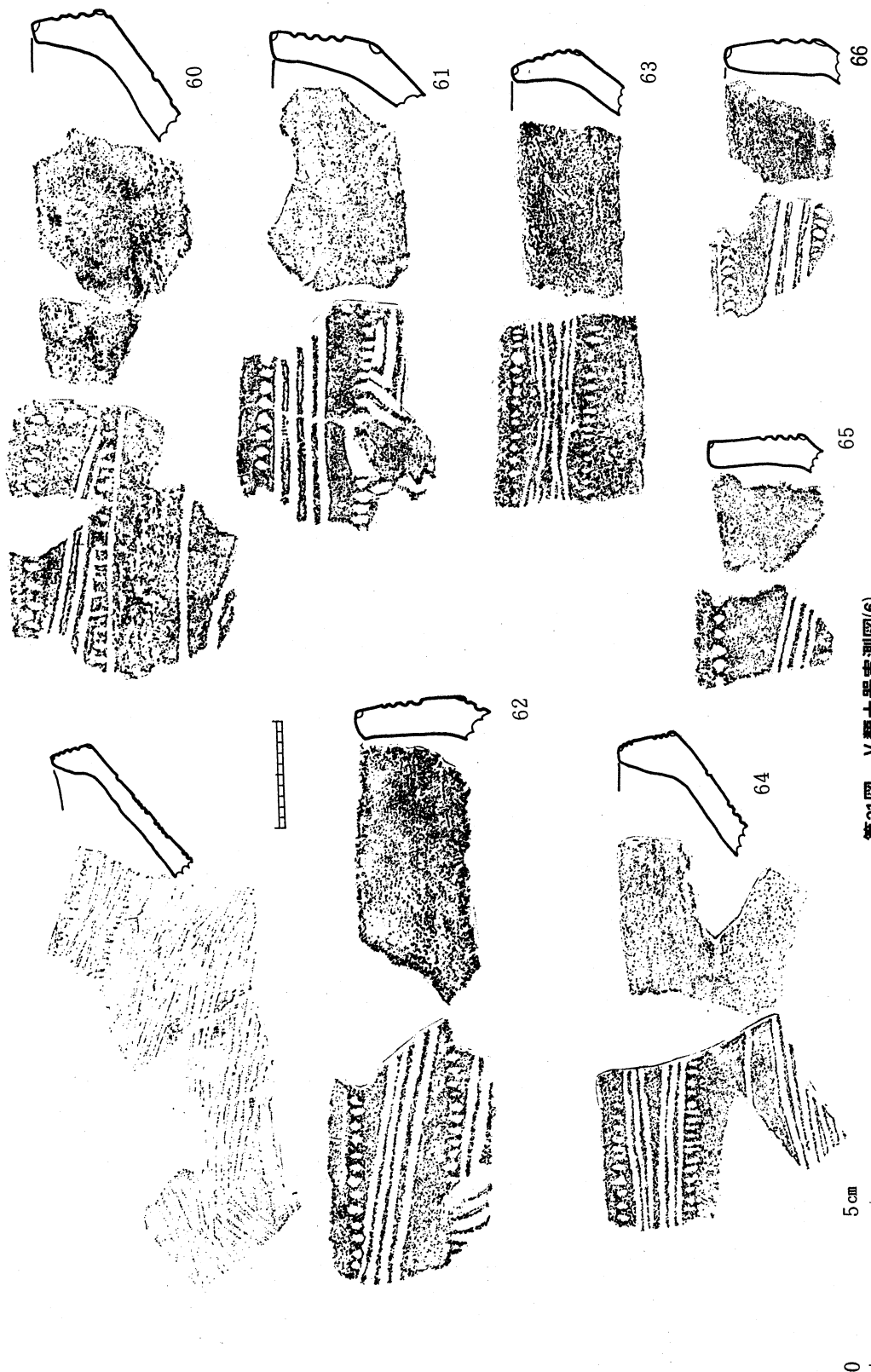
69～73は、口縁部の屈曲部が若干長めになり、凹線により幾何学文を施すものである。69・70は、口唇部に刻目を施すが、屈曲部には施さない。71は、口唇部と屈曲部に刻目を施し、その直下に平行凹線文を施し、この凹線文に縦位に4本単位の弧状の凹線文を施す。72は、波状の凹線文を口縁部先端に向かって垂直に施すものである。73は、若干屈曲部端が内傾し、凹線文により幾何学文を構成する。

74～77は、凹線文に沿うように刺突連点文を施すものである。74・75は、若干内傾するもので、細形凹線文により幾何学文を構成し、弧状の細形凹線文に沿うように、刺突連点文を施す。磨き調整であり、焼成は良好で、ススが付着している。76は、屈曲部直上に凹線文を巡らし、上位および下位に刺突連点文を施すが摩滅している。77は、横位の凹線文を施し、これに接するように弧状に施すもので、弧状の凹線文に沿って刺突連点文を施す。78は、外反する口縁に3条単位の凹線文を巡らし、屈曲部に刻目を施すものである。79は、屈曲部直下に3条単位の凹線文を施し、縦位の撚糸文を施すものである。

②胴部 (第23図～第28図-80～145)

胴部の形態は、ほぼ円筒形を呈するが、文様構成に若干のバリエーションが認められる。撚糸文を縦位に施し、凹線文で幾何学的な文様構成をするものである。撚糸文と網目状撚糸文がある。

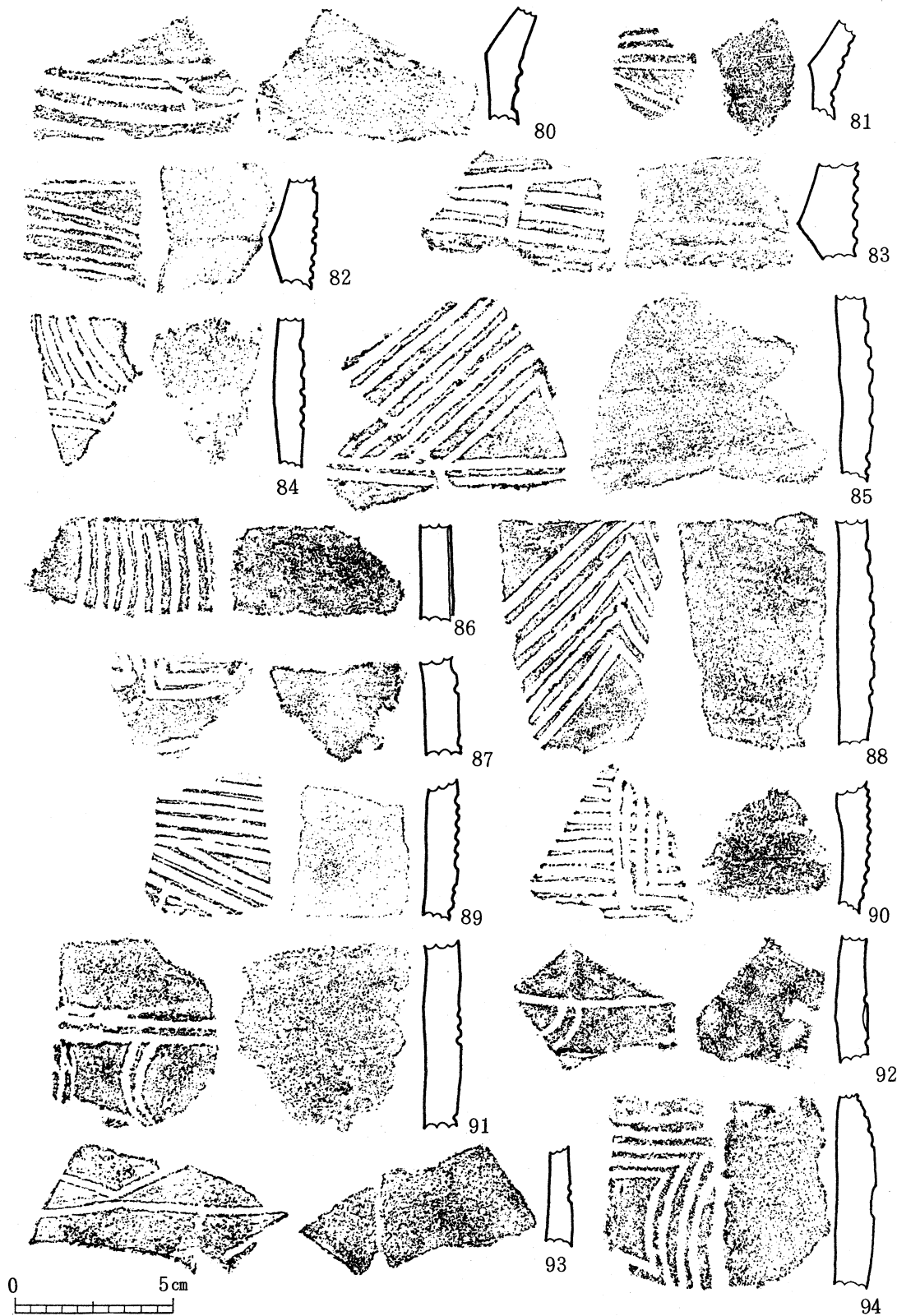
80～94は、幾何学凹線文を施すもので、80・83は、明瞭な屈曲部下位に凹線文を4条施し、



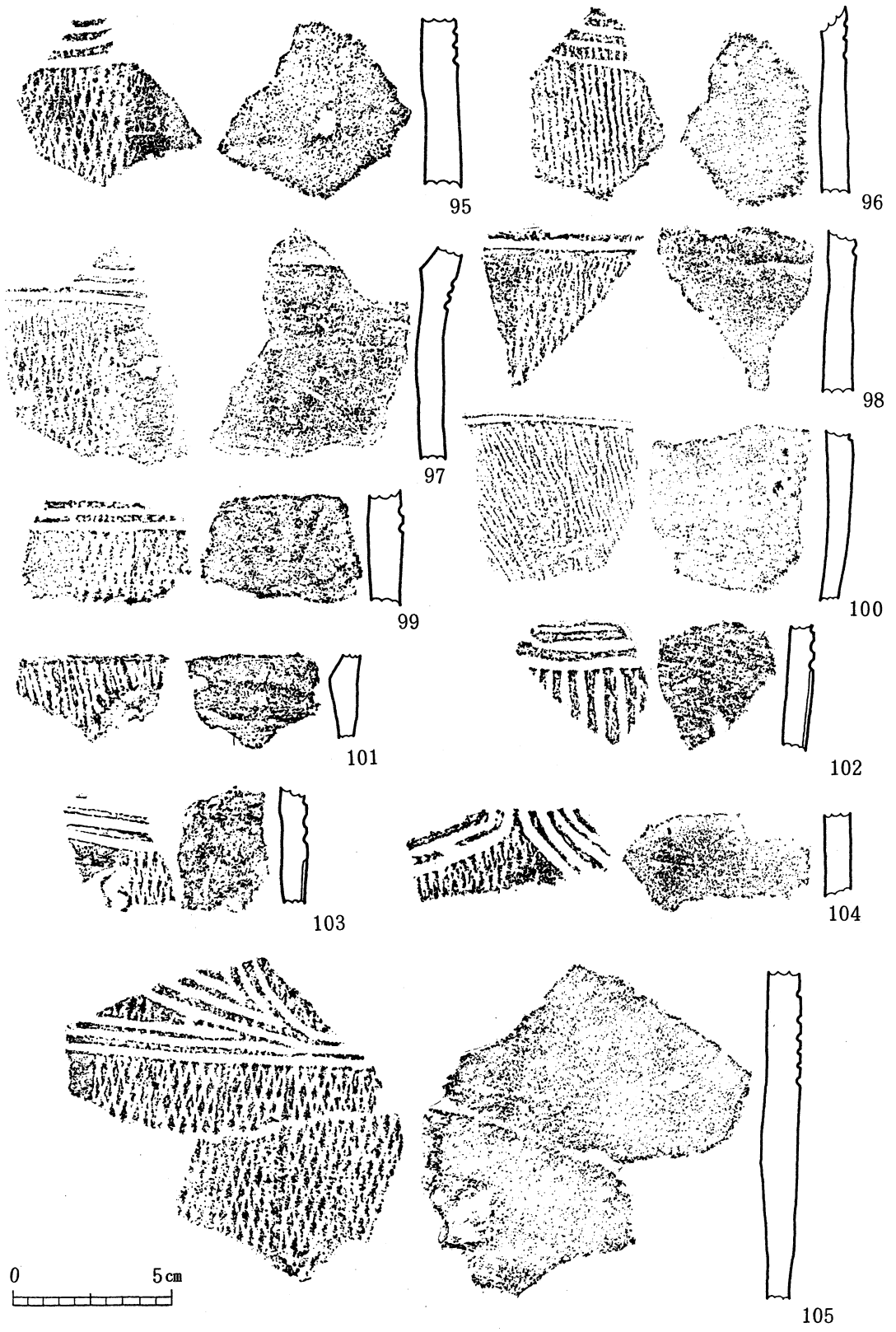
第21圖 V類土器実測図(6)



第22图 V類土器実測図(7)



第23图 V類土器実測図(8)



第24图 V類土器実測图(9)

1本目と4本目を弧状に結ぶもので、81・82は、屈曲部に凹線文に横位あるいは斜位に施す。84は、3条の凹線文を横位に施し、弧状の凹線文を施すことにより、幾何学文を構成するものである。85・88は、凹線文で三角形の幾何学文を施すもので、焼成および胎土が類似している。86は、8条の凹線文を弧状に施す。89は、数条の凹線文を横位あるいは斜位に施すもので、磨き調整であり、焼成は良好である。90は、横位の凹線文を数条施し、その上から縦位の凹線文を施すことにより、幾何学文を構成するものである。91・92は、1～3条の凹線文を横位に施し、縦位に弧状の2条の凹線文を施す。92・93は、焼成および胎土が類似している。94は、方形幾何学文を施す。

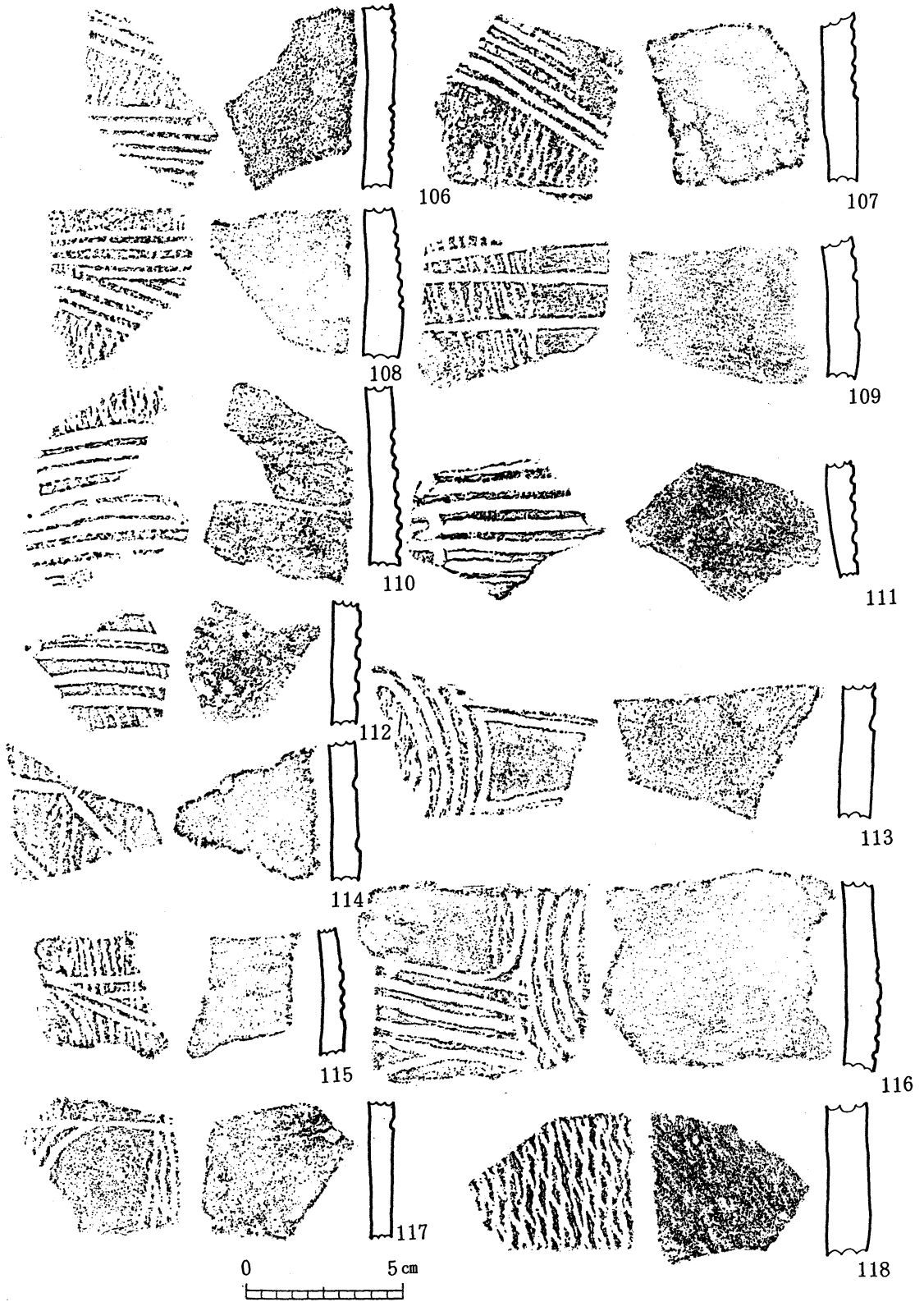
95～0124は、捺系文を縦位に施し、幾何学凹線文を施文するもので、捺系文を間隔をおかずに束にするものである。捺系文は、網目状捺系文（95・97～99, 102～108, 110・113・116・118～121, 123・124）と捺系文（96・100・101・109・112・114・115・117・122）が認められる。

95～0103は、捺系文を束にして縦位に施し、凹線文を横位に施すもので、95・96は、摩滅しており、96はススが付着している。97は、明瞭な稜線を屈曲部内面にもつもので、ナデ調整で焼成は良好である。100は、薄手で若干摩滅している。101は、屈曲部内面の稜は明瞭である。102は、横位に数条の凹線文を施し、網目状捺系文を施したあと縦位に数条の凹線文を施すものである。103は、縦位の網目状捺系文に沿うように、波状の凹線文が施される。104は、弧状の凹線文を横位に幾何学的に施している。105は、屈曲部の近くの胴部破片であり、15mm単位の網目状捺系文を束にして縦位に施し、凹線文で幾何学模様を施す。106～109は、数条の凹線文を横位あるいは斜位に施すもので、110は、太形の凹線文を数条横位に施し、111・112は、横位の凹線文の上と下の凹線文を弧状に結ぶものである。113～117は、凹線により幾何学文を構成するもので、114は丁寧なナデ調整で、114は、捺系の施文が荒いタッチのものである。116は、121と焼成および胎土が類似している。118～120は、破片のため網目状捺系文しか認められないもので、15mm単位の網目状捺系文を間隔をおかずに束にして施す。121～124は、底部近くの胴部破片で、121～123は、凹線文を数条横位に施し、124は、曲線文を施すものである。

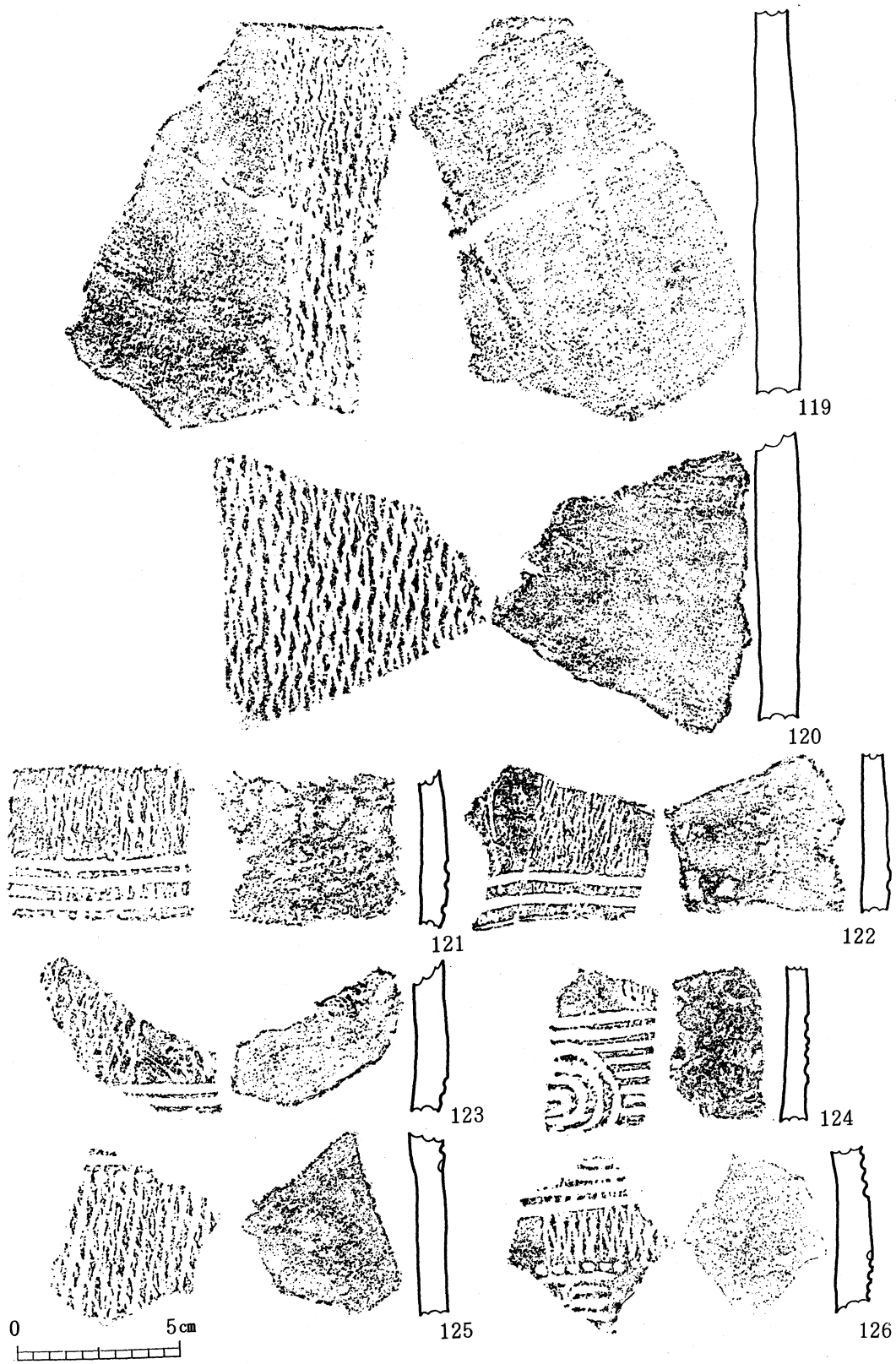
125～132は、刺突連点文を凹線文に沿うように施すものである。刺突連点文は、断面形がU字状（125～129, 131・132）のものと断面V字状（130）のものが認められる。

125, 126は、網目状捺系文、凹線文を施すもので、刺突連点文を125は凹線文下位に、126は上位に施す。127～132は、直線、曲線の横位あるいは斜位の凹線文により、幾何学文を構成するもので、127～132は、凹線文の上位および下位に刺突連点文を施すものであるが、132のように3条の刺突連点文を斜位に施すものもある。磨き調整で焼成は良好である。127～129は、焼成および胎土が類似している。130は、幾何学凹線文が浅い施文のものである。

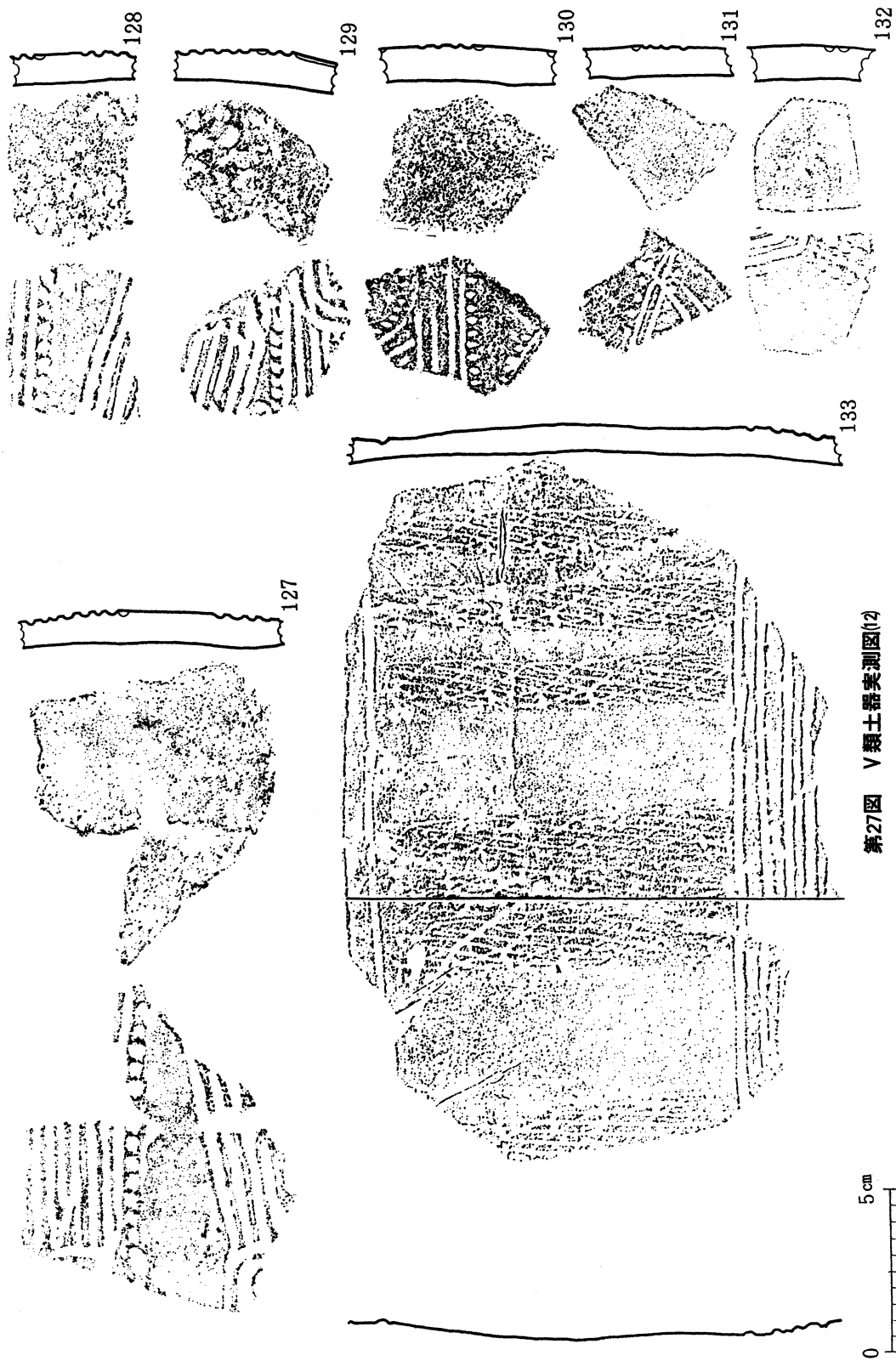
133は、屈曲部下端から胴部中央までの若干膨らみをもつ胴部破片である。14mm単位の網目状捺系文を縦位に間隔をおいて施し、40mmの無文部をおき3条単位の網目状捺系文を施す。



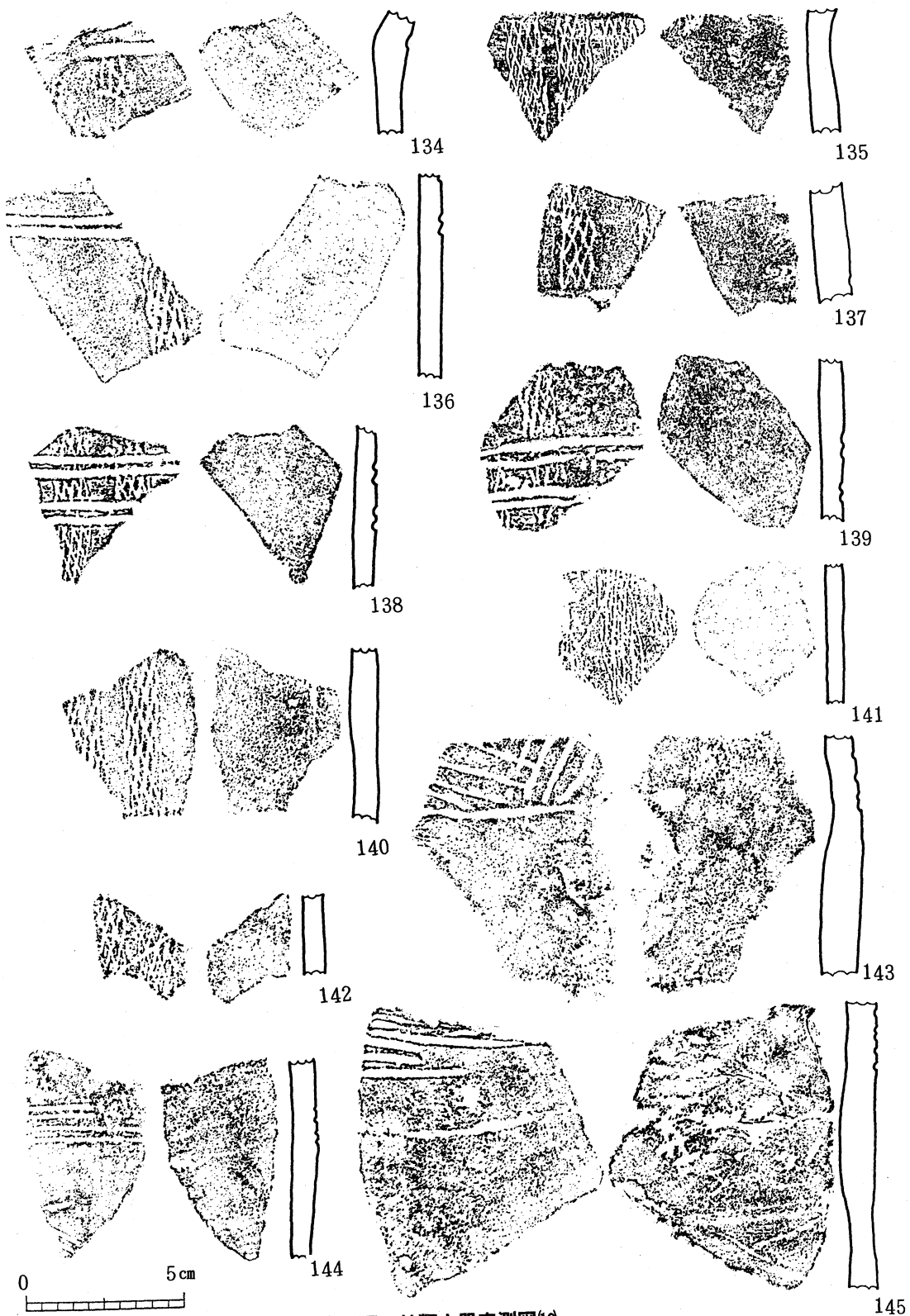
第25图 V類土器実測図(10)



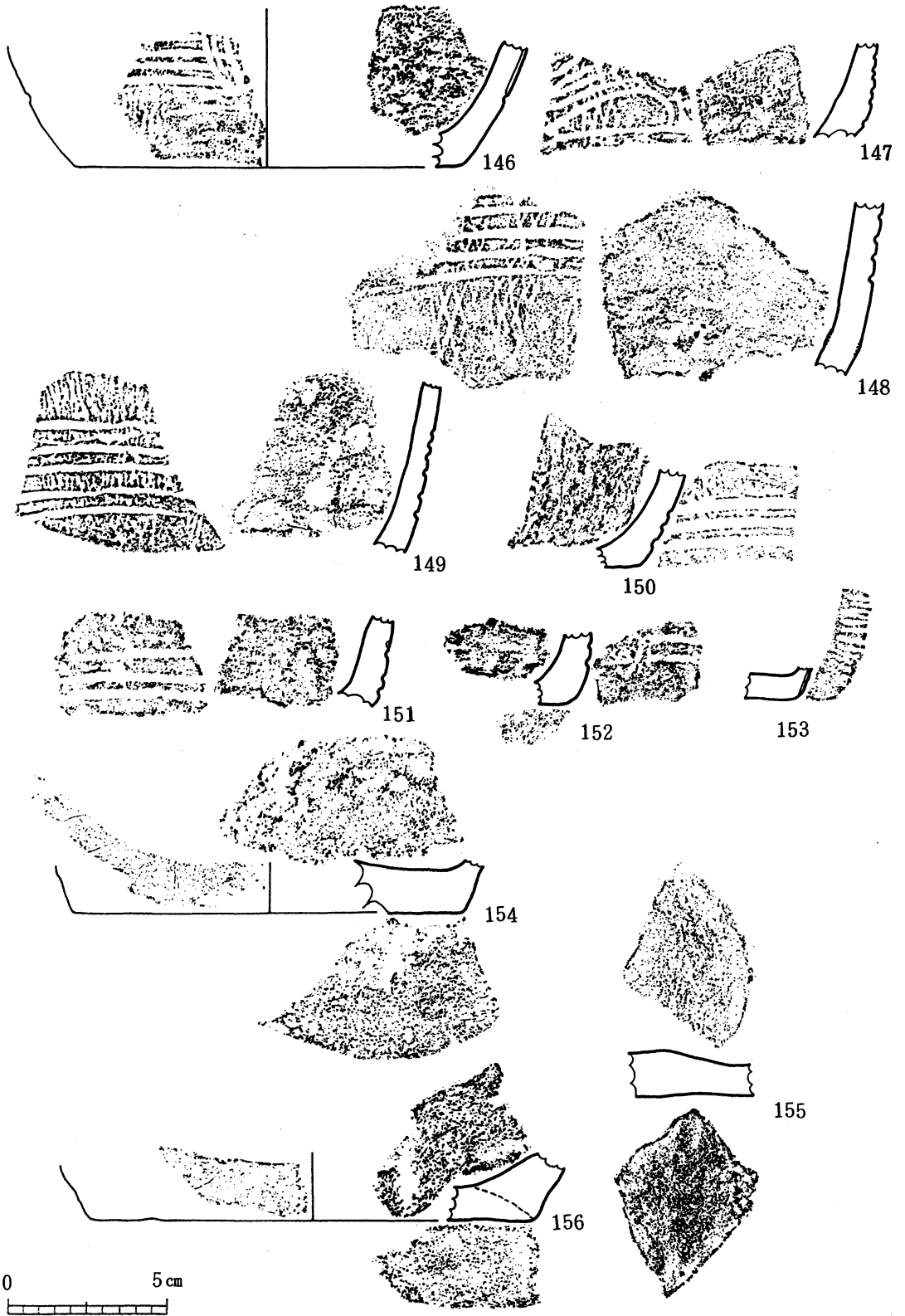
第26图 V類土器実測図(1)



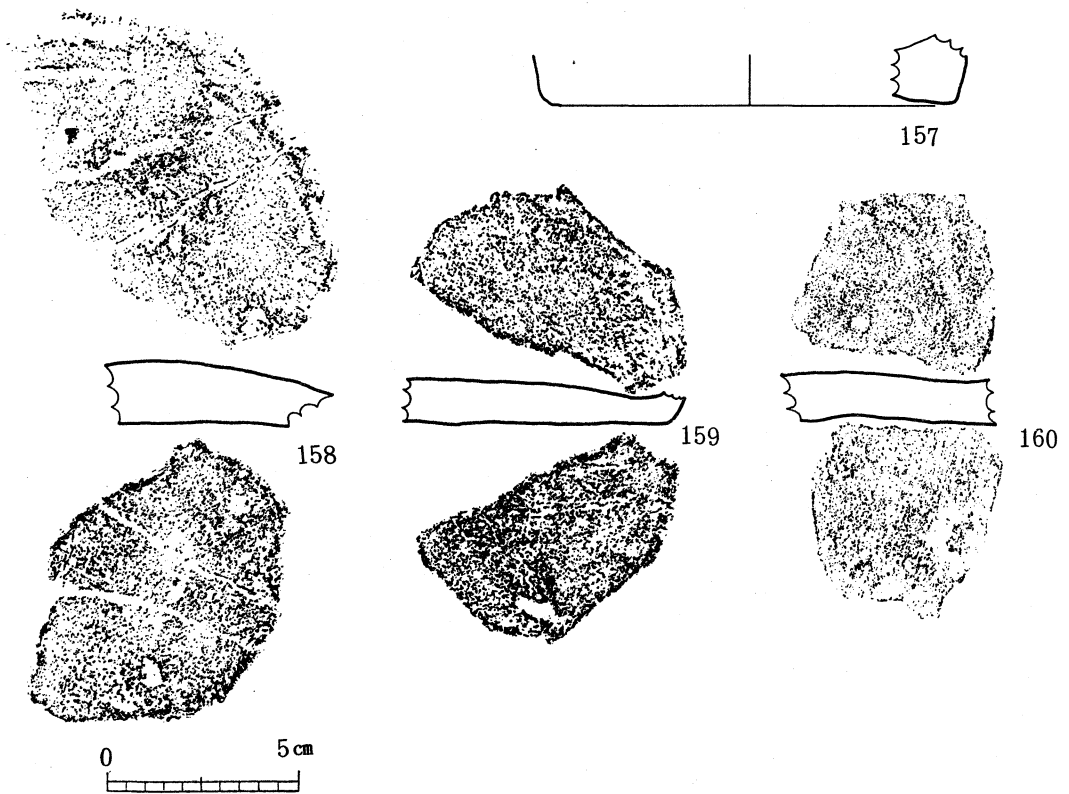
第27图 V類土器実測図(12)



第28图 V類土器実測図(13)



第29圖 V類土器実測図(14)



第30図 V類土器実測図(15)

屈曲部下端と胴部中央には数条の横位の凹線文を施す。多量のススが付着している。

134~142は、間隔をおいて単独で縦位の網目状撚糸文を施すもので、器壁は若干薄いようであるが、焼成は良好である。134は、不明瞭な屈曲部に凹線を横位に施し、135は、丁寧なナデ調整で、焼成も良好である。136・138・139は、平行凹線文を横位に施す。140・141は、小破片の為、縦位の単独網目状撚糸文しか認められないものである。

143~145は、その他の胴部片で、143は、4条単位の浅いへら沈線を交差させるもので、内面は、ナデ調整であるが凹凸を認める。144は、4条の浅い沈線が、横位あるいは斜位に施される。145は、凹線を横位に施すが不規則であり、内面は凹凸が認められる。

③底部 (第29図~第30図-146~160)

平底と若干上げ底気味の平底が認められ、施文は、撚糸文、凹線文、刺突文と無文がある。

146・147は、縦位の網目状撚糸文は底部端まで達し、凹線による幾何学文を施す。148・149は、横位の多条の凹線文を施すもので、148は、粘土の付着が認められる。150, 151は、横位に3条の凹線文を施すもので、151は、上位に刺突連点文が施される。153は、底部端に多条の撚糸文が認められる。154~160は無文の底部であり、156は、粘土の継ぎ目が認められ、157は、上げ底気味となるものである。

(2) 壺形 (第31図～第33図-161～179)

口縁部は、肩・胴部上半から内傾したままでおさめるものである。口唇部若干内傾し、丸くおさめるものと、平坦にするものが認められ、そこには刻目を施すものが主体であるが、中には施さないものもある。施文および隆起帯の形成は、若干バリエーションが認められる。

a : 161～165は、口唇部から胴部上半にかけて数条の隆起突帯に刻目を施し巡らせるものである。刻目は繁雑である。また、外面は丁寧なナデ調整であるが、内面は荒いナデ調整であり凹凸が残る。

161は、口唇部は、若干内傾気味にして丸くおさめ、口唇部外端に刻目を施し、口縁部外面上位に5条巡らし、間隔をおいて6条巡らす。色調は茶褐色であり、焼成は良好である。胎土には角閃石、長石、石英を含む。

b : 166～169は、口縁部に微隆突帯を数条巡らせるものである。隆起部の形成および刻目は丁寧である。また、外面内面ともに丁寧な磨き調整で焼成も良好である。

166は、口唇部は内傾するが、平坦におさめ口唇部外端に刻目を施す。口縁部外面は内傾気味になり、数条の丁寧な微隆突帯を巡らす。内外面にススが付着している。

c : 171～172は、口縁部に隆起帯を数条巡らせるものである。凹線文を施すことにより、隆起部を形成し、そこに爪形の刻目を施す。外面内面ともナデ調整であるが、若干繁雑である。口唇部は、平坦におさめ刻目は施さないようである。

d : 173は、口縁部に数条の凹線文を巡らせるものである。凹線文により隆起部を形成するが、そこには刻目を施さない。口唇部は、丸くおさめ若干肥厚する。色調は、淡茶褐色である。

174～179は、胴部破片である。無文であるが焼成、胎土、調整が類似している為、ここに含めたが、傾きは不安である。174～178は、外面は丁寧なナデ調整であるが、内面は荒いナデであり、凹凸が認められる。176～178は、胴部外面の下位が梅華皮状になっている。179は、底部と思われる。

Ⅵ類土器 (第34図～第35図-180～195)

180～189は、幾何学凹線文の区画内に網目状撚糸文、撚糸文、縄文、刺突連点文を施すものである。

180は、若干内湾しながらラップ状に外反する口縁部破片で、屈曲部の稜線は明瞭である。口縁部外面に幾何学凹線文の区画内に撚糸文を回転押捺するもので、幾何学凹線文下位に刺突



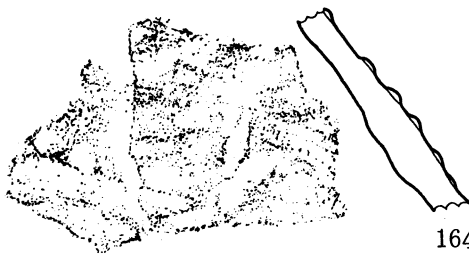
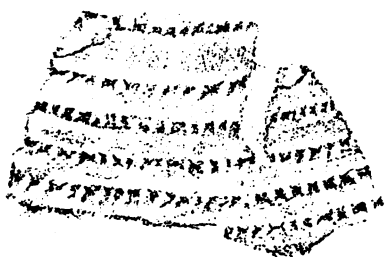
第31图 V類土器実測図(6)



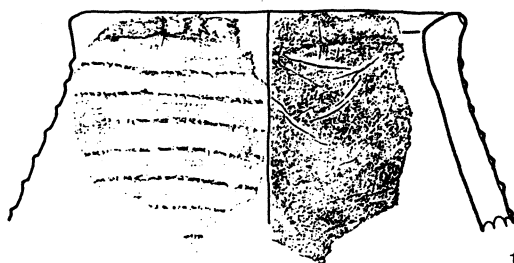
162



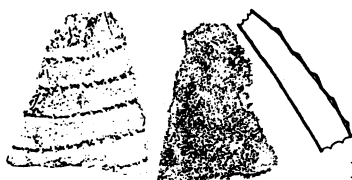
163



164



165



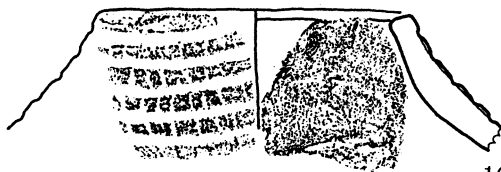
166



167



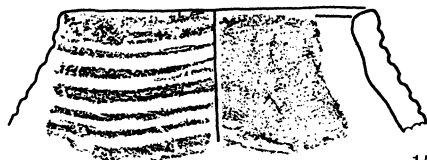
168



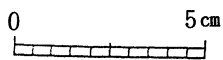
169



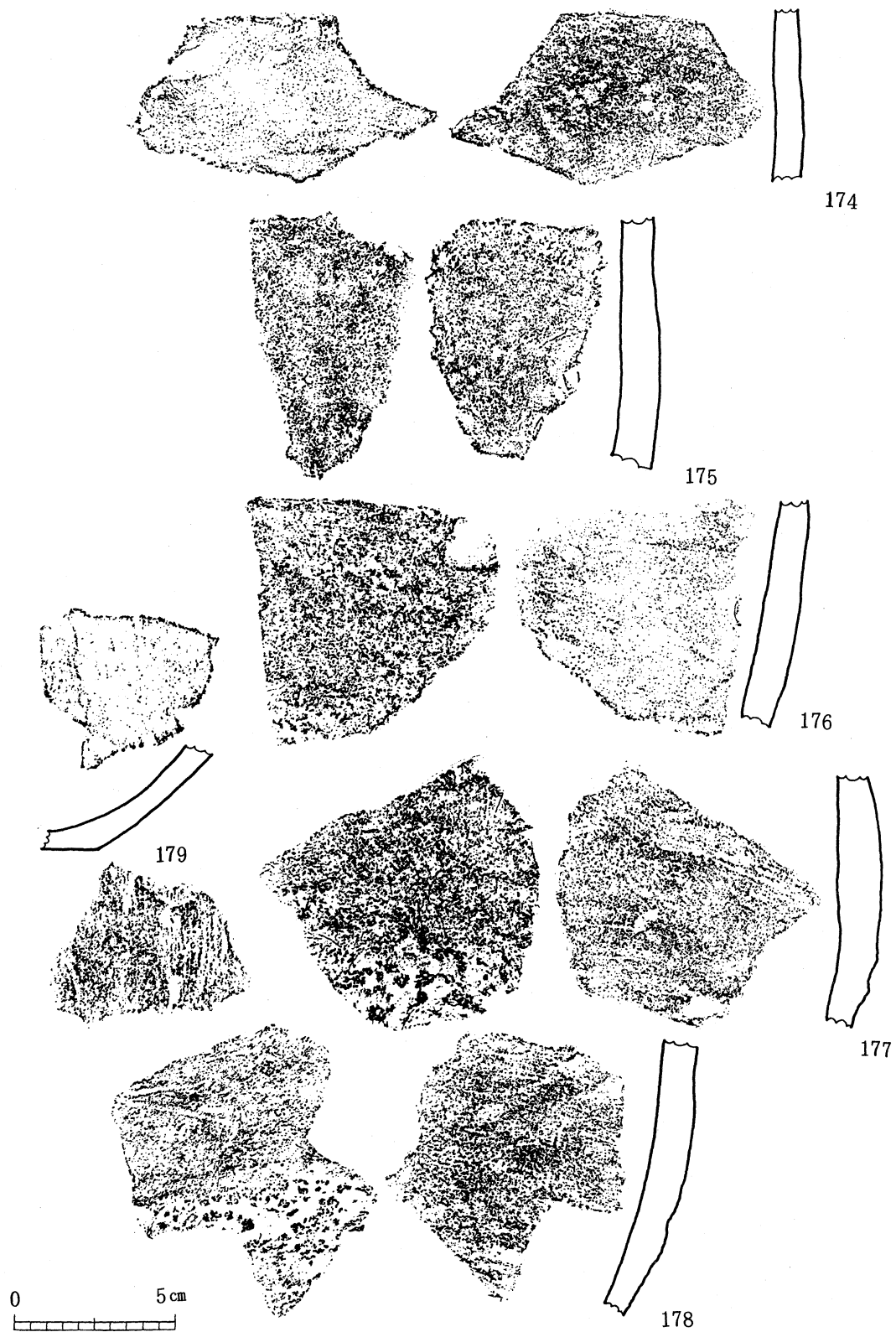
170



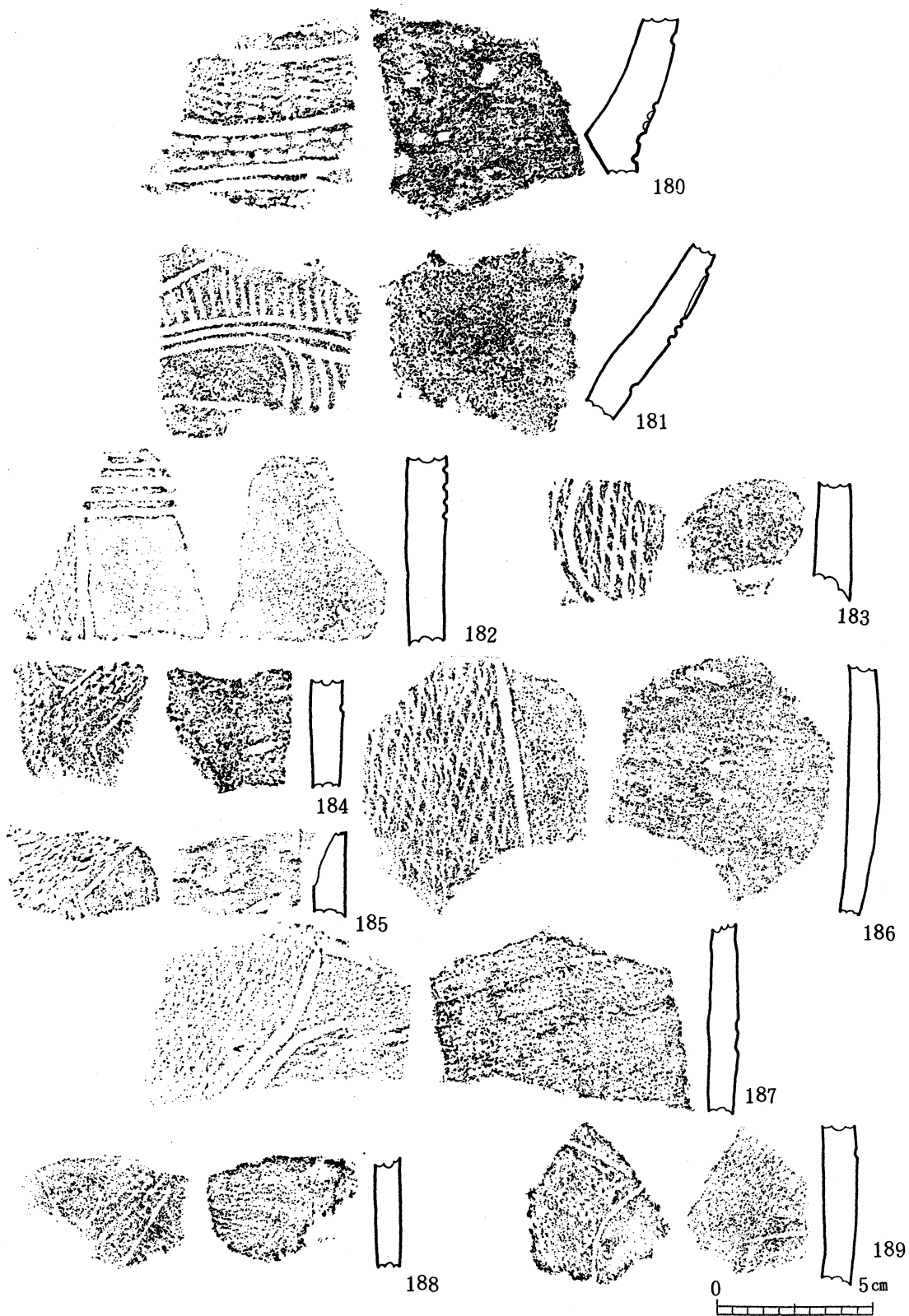
171



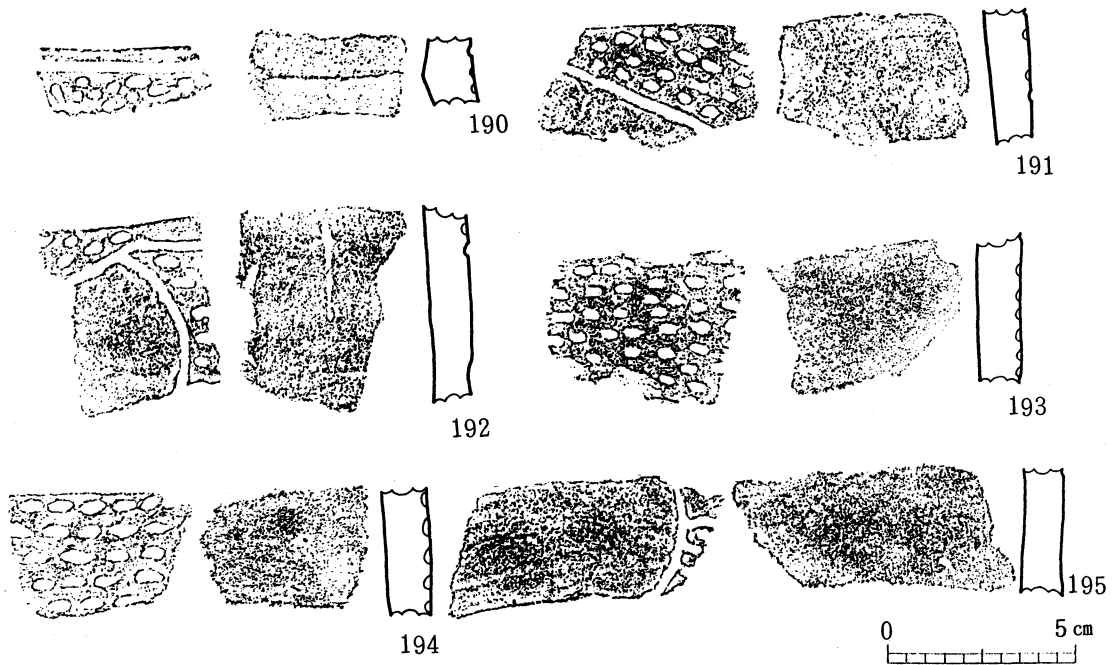
第32図 V類土器実測図(17)



第33圖 V類土器実測図(10)



第34图 VI類土器実測図(1)



第35図 VI類土器実測図(2)

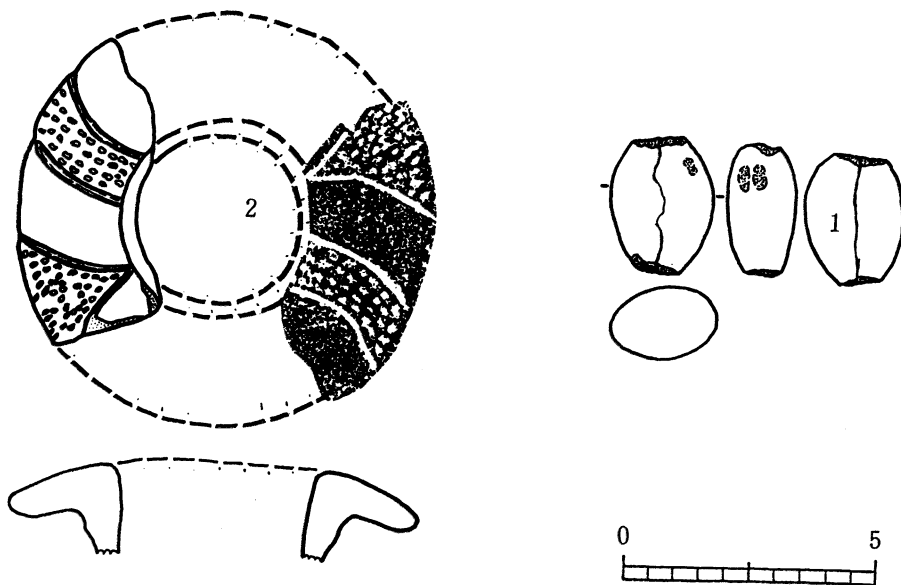
連点文を施す。さらに屈曲部に2条の凹線文を横位に施し、その上位に刺突連点文を施す。色調は茶褐色で、摩滅している。181は、ラッパ状に外反する口縁部で、幾何学凹線文を横位あるいは斜位に施すことにより区画を形成し、そこに縄文および凹線文を施すものである。

182～189は、幾何学凹線文の区画内に撚糸文を施すもので、太形幾何学凹線の区画内に網目状撚糸文を施すものと（182・183・186・187）浅い幾何学凹線文の区画内に撚糸文を施すもの（184・185・118・189）がある。

190～196は、幾何学凹線文の区画内に刺突連点文を施すもので、丁寧な磨き調整で焼成も良好である。190は頸部破片であり、明瞭な稜線が内面に認められる。色調は外面が黒褐色で、内面は茶褐色である。195は、刺突連点文は認められないが、胎土、焼成等から同一系統のものと思われる。

196は、耳飾りと考えられている耳栓である。浅い幾何学沈線の区画内に先の尖った工具により連点を不規則に充填するものである。文様が施されている外側は丁寧なナデ調整であるが、内側は荒いナデ調整である。胎土には角閃石、長石、石英を含む。

耳栓は、縄文時代中期以降に東日本を中心として出土例が見られるようであるが、文様構成などから塞ノ神式土器に伴うものであろうと考えられる。県内においては類例が少なく、唯一知覧町石坂上遺跡で二列出土しているだけである。本遺跡のものは、石坂上遺跡出土のものより大型のようである。197は、砂岩質の自然円礫を素材とする小型の叩石と思われる。



第36図 耳栓および石器実測図

第5章 まとめにかえて

今回調査対象区域となった下田遺跡のB地区は、尾根状台地の微高部が耕作によって削平を受け、その北西側の緩斜面であるため、遺構などは検出されなかったが、縄文時代早期末の塞ノ神式土器を単純に包含する遺跡であった。縄文早期の壺形土器をはじめ耳栓の出土など貴重な資料を出土するに至った。

出土した土器については、その形態から便宜的にⅥ類に類別し、さらに特徴によって細分した。Ⅰ～Ⅳ類は、出土遺跡は少量であり、Ⅴ・Ⅵ類が主体を占め、バリエーションも多彩であった。

Ⅰ類土器は、川辺郡知覧町石坂上遺跡の出土土器を標識とする石坂式土器で、貝殻腹縁による丁寧な綾杉文を施すのが特徴である。本町においては倉園B遺跡でまとめて出土している。

Ⅱ類土器は、いわゆる桑ノ丸遺跡出土の3類土器⁽¹⁾に類似するものである。4・5は櫛状施文具で流水文を施すもので三代寺遺跡の4類土器⁽²⁾に酷似する文様構成のものである。本町においては下牧・上田屋敷遺跡が知られている。

Ⅲ類土器は、平椀式土器に類似するものである。県内では前畑遺跡⁽³⁾でまとめて出土しており、本町においては大長野遺跡が知られている。

Ⅳ類土器は、手向山式土器に類似するもので、「く」の字に屈曲するのが特徴である。県内

においては、中尾田遺跡で多量の出土が知られている。

V類土器は、河口貞徳氏の塞ノ神A a式土器⁽⁴⁾にあたり、新東晃一氏の石坂上式土器、梶ノ原式土器の範疇に入るものと思われるものである⁽⁵⁾。深鉢は、口縁部に特徴が認められ、口縁部がラッパ状に開くものと、外反する口縁部の端部がキャリパー状に屈曲するものがある。また、平縁が主体であるが中には波状口縁も認められる。文様構成は、幾何学凹線文を施文するものが主体を占め、撚糸文は間隔をおかずに施すもの、間隔をおいて施すもの両方が存在するようである。本町においては、石踊遺跡⁽⁶⁾、夏井土光遺跡などが知られており、県内においては、小山遺跡⁽⁶⁾、石坂上遺跡の出土遺跡の出土例が知られている。

壺形土器は、隆起帯の形成に着眼し、a：隆起帯に複雑な刻目を施すもの。b：微隆突帯に丁寧な刻目を施すもの。c：凹線文を施すことにより隆起帯を形成し、爪形の刻目を施すもの。d：凹線文を施して隆起帯を形成するが刻目を施さないもの。a～dに細分したが同一系統の壺形土器と思われる。本遺跡出土の微隆突帯を施すものは、本町においては石踊遺跡⁽⁶⁾で出土しており、県内においては吹上町塚ノ越遺跡⁽⁷⁾に類似するものであるが、若干のバリエーションが認められ、注目されることである。壺形土器については、最近、新東晃一氏により集成がなされている。

VI類土器は、幾何学凹線文の区画内に撚糸文および刺突連点文を施すもので、河口貞徳氏の塞ノ神A b式土器⁽⁴⁾にあたるもので、新東晃一氏の鍋谷式土器、木佐貫原式土器の範疇に入るものと思われる⁽⁵⁾。本町においては、石踊遺跡などが知られており、幾何学凹線文の区画内に撚糸文を施すものが一般的であると思われるが、本遺跡においては刺突連点文を充填するもので、県内においては、類例は少ないようである。刺突連点文を施すものは、磨き調整であり、焼成も非常に良好で若干の相違が認められる。

縄文早期末の塞ノ神式土器をほぼ単純に包含する遺跡であった。壺形土器および耳栓は県内に類例は少なく、今後の資料の増加に期待したい。

(参考文献)

- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| (1)新東晃一他「桑ノ丸遺跡」鹿児島県教育委員会 1977年 | (6)戸崎勝洋他「小山遺跡」鹿児島県教育委員会 1982年 |
| (2)新東晃一他「三代寺遺跡」鹿児島県教育委員会 1979年 | (7)新東晃一他「縄文通信」南九州縄文研究会No.4 1991年 |
| (3)新東晃一他「前畑遺跡」鹿児島県教育委員会 1990年 | (8)立神次郎他「石踊遺跡」志布志町教育委員会 1979年 |
| (4)河口貞徳「塞ノ神式土器と轟式土器」鹿児島考古19号 1985年 | (9)「知覧郷土誌」知覧町教育委員会 |
| (5)新東晃一他「塞ノ神式土器再考」日本民族・文化の生成 1988年 | |

第2表 B地区出土土器観察表

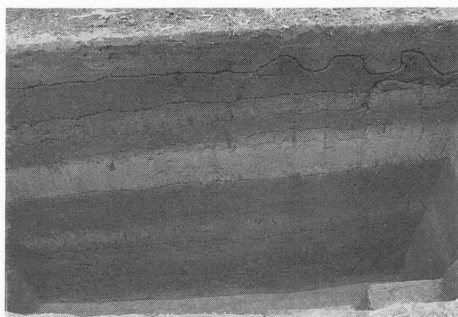
挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎 土	色 調	外面調整	内面調整	備 考
第10図	1	10T	Ⅵ	角閃石・長石・石英	茶褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	器壁薄手
	2	10T	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	?	?	摩滅
第14図	3	10-B	Ⅵ	角閃石・長石・石英・金雲母	暗茶褐色	ナデ	丁寧なナデ	綾杉文、小礫多量含む
	4	7-B	〃	角閃石・長石・石英	茶灰色	ナデ	ナデ	流水文、小礫多量含む
	5	7-B	〃	角閃石・長石・石英	暗黄茶褐色	ナデ	ナデ	荒いタッチの流水文
	6	9-B	〃	長石・石英・金雲母	暗赤褐色	ナデ	ヘラ削り	羽状文、小礫多量含む
	7	8-B	〃	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	?	ナデ	丁寧な羽状文
	8	10-B	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	?	ナデ	荒いタッチの羽状文
	9	6-B	〃	角閃石・長石・石英	黄褐色	?	?	荒いタッチの羽状文
	10	10-B	〃	角閃石・長石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	ナデ	羽状文
第15図	11	10-B	Ⅵ	角閃石・長石・石英・金雲母	赤褐色	ナデ	ナデ	羽状文
	12	8-C	〃	角閃石・長石・石英・金雲母	暗茶褐色	荒いナデ	荒いナデ	荒いタッチの羽状文
	13	6-C	〃	角閃石・長石・石英・金雲母	暗褐色	ナデ	?	
	14	6-C	〃	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	ヨコナデ	「く」の字に屈曲
	15	6-C	〃	角閃石・長石・石英・金雲母	茶灰色	ナデ	ナデ	突帯状に盛り上げ刻目
第16図	16	9-C	Ⅵ	角閃石・長石	茶褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	内湾
	17	10-B	〃	角閃石・長石	茶灰色	ナデ	ヨコナデ	幾何学文、スス付着
	18	3-C	〃	角閃石・長石・金雲母	茶褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	器壁薄手
	19	8-C	〃	角閃石・長石	褐色	磨き	磨き	曲線文
	20	10-B	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	丁寧なナデ	ナデ	曲線文、頸部下位燃系文
	21	6-C	〃	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ナデ	多条凹線幾何学文
	22	6-D	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部文様部まで燃系文
	23	9-C	〃	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	ナデ	摩滅
	24	6-C	〃	角閃石・長石	明茶褐色	ナデ	ナデ	摩滅
	25	11-B	〃	角閃石・長石・石英	明茶褐色	ナデ	ナデ	摩滅
第17図	26	3-C	Ⅵ	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	ナデ	凹線を弧状に結ぶ
	27	10-B	〃	角閃石・長石	茶褐色	ヨコナデ	丁寧なヨコナデ	スス付着
	28	8-C	〃	角閃石・長石	明茶褐色	丁寧なヨコナデ	磨き	焼成良好
	29	3-C	〃	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	ヨコナデ	器壁厚手
	30	7-C	〃	角閃石・長石・石英・金雲母	茶灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	スス付着
第18図	31	8-C	Ⅵ	角閃石・長石・石英	茶灰色	ヨコナデ	ナデ	頸部下位燃系文
	32	3-C	〃	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ヨコナデ	ナデ	器壁厚手
	33	8-C	〃	角閃石・長石・石英	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	器壁厚手
	34	10-C	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	丁寧なナデ	ヨコナデ	焼成良好、若干内湾
	35	7-C	〃	角閃石・長石	暗褐色	磨き	ヨコナデ	焼成良好
	36	7-C	〃	角閃石・長石	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	浅い平行凹線・スス付着
	37	8-C	〃	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	ナデ	浅い平行凹線・器壁薄手
	38	8-C	〃	角閃石・長石	茶灰色	ヨコナデ	丁寧なヨコナデ	スス付着・羽状刻み目
	39	9-B	〃	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	ナデ	浅い3条凹線
	40	8-C	〃	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	口唇部に刻線
第19図	41	2-B	Ⅵ	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	断面V字状刺突連点
	42	10-B	〃	角閃石・長石・石英	淡灰色	丁寧なヨコナデ	ヨコナデ	断面U字状刺突連点
	43	7-C	〃	角閃石・長石・石英	暗茶灰色	ナデ	ナデ	スス付着
	44	7-C	〃	角閃石・長石・石英	暗茶灰色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	スス付着
	45	11-A	〃	角閃石・長石	暗茶灰色	ヨコナデ	ナデ	スス付着
	46	6-C	〃	長石・石英・金雲母	褐色	ヨコナデ	丁寧なナデ	内湾気味の口縁
	47	8-C	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	ナデ	単独刺突連点、摩滅
	48	11-A	〃	長石・石英	淡茶褐色	ナデ	磨き	器壁薄手
	49	10-B	〃	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	頸部下位に燃系文
	50	9-C	〃	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	ナデ	摩滅

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎 土	色 調	外面調整	内面調整	備 考
第20図	51	8-C	Ⅵ	角閃石・長石	明茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	波状口縁
	52	3-C	〃	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	ナデ	凹線文上位刺突連点
	53	11-B	〃	角閃石・長石・石英	明茶褐色	ナデ	ナデ	
	54	11-B	〃	角閃石・長石	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
	55	8-C	〃	角閃石・長石	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部分にまで燃系文
	56	8-C	〃	角閃石・長石・石英	暗褐色	磨き	磨き	孤状に結ぶ
	57	8-C	〃	角閃石・長石・石英	暗赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	スス付着・無文
	58	3-C	〃	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	ナデ	無文
第21図	59	3-C	Ⅵ	角閃石・長石・石英	茶褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	波状口縁
	60	8-C	〃	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ヨコナデ	
	61	10-B	〃	角閃石・長石	明茶褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	波状の凹線文
	62	11-C	〃	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
	63	3-C	〃	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	ナデ	摩滅
	64	3-C	〃	角閃石・長石	暗茶黄褐色	ナデ	ナデ	口縁部端肥厚
	65	9-C	〃	角閃石・長石	茶褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	
	66	11-B	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	磨き	ヨコナデ	
第22図	67	11-B	Ⅵ	角閃石・長石	茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	刺突連点文状の刻目
	68	11-B	〃	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	ヨコナデ	刺突連点文状の刻目
	69	8-C	〃	角閃石・長石・石英	茶黄褐色	ナデ	ヨコナデ	屈曲部刻目施さない
	70	6-C	〃	角閃石・長石	暗茶褐色	丁寧なヨコ	丁寧なヨコナデ	屈曲部刻目施さない
	71	9-B	〃	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ナデ	幾何学文
	72	8-C	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	丁寧なナデ	波状の凹線文
	73	7-B	〃	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ナデ	幾何学文
	74	7-C	〃	角閃石・長石・石英	暗茶灰色	ナデ	ナデ	焼成良好 スス付着
	75	10-B	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	磨き	磨き	焼成良好
	76	6-C	〃	角閃石・長石	茶灰色	ナデ(?)	ヨコナデ	摩滅
	77	2-B	〃	角閃石・長石	淡茶褐色	丁寧なナデ	ヨコナデ	幾何学文
	78	5-C	〃	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	ナデ	
	79	11-B	〃	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	ナデ	口縁部文様部分に燃系文
第23図	80	8-C	Ⅵ	角閃石・長石	明茶褐色	ナデ	ナデ	孤状に結ぶ
	81	10-C	〃	角閃石・長石	暗茶褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	
	82	7-C	〃	角閃石・長石・石英	暗黄茶褐色	ナデ	ナデ	
	83	8-B	〃	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	ナデ	孤状に結ぶ
	84	11-B	〃	角閃石・長石・石英	暗褐色	丁寧なナデ	ナデ	
	85	11-B	〃	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	三角状幾何学文
	86	10-B	〃	角閃石・長石	暗黄茶褐色	ナデ	ナデ	
	87	11-B	〃	角閃石・長石	明茶褐色	磨き	丁寧なヨコナデ	
	88	11-B	〃	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	ヨコナデ	ナデ	三角状幾何学文
	89	6-C	〃	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	磨き	磨き	調整・焼成良好
	90	8-C	〃	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	ナデ	ヨコナデ	
	91	6-C	〃	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	ナデ	ナデ	砂粒多し
	92	6-B	〃	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	丁寧なナデ	ナデ	
	93	9-C	〃	角閃石・長石・石英	暗褐色	ヨコナデ	ナデ	スス付着
	94	10-B	〃	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
第24図	95	10-C	Ⅵ	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ナデ	摩滅
	96	11-B	〃	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	ナデ	スス付着
	97	9-C	〃	角閃石・長石・石英	明赤褐色	丁寧なナデ	ヨコナデ	屈曲部明瞭
	98	9-B	〃	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
	99	9-B	〃	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ナデ	摩滅
	100	11-A	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	ナデ	内面多量のスス付着

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎 土	色 調	外面調整	内面調整	備 考
第24図	101	11-B	Ⅵ	角閃石・長石・石英	暗黄褐色	ナデ	ナデ	
	102	6-C	〃	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	ヨコナデ	
	103	10-B	〃	角閃石・長石	茶灰色	ナデ	ナデ	波状の凹線文
	104	8-C	〃	角閃石・長石・石英	暗茶灰色	ナデ	ヨコナデ	
	105	9-B	〃	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ヨコナデ	
第25図	106	6-C	Ⅵ	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	ナデ	摩滅
	107	11-B	〃	角閃石・長石・石英	明茶褐色	ナデ	ナデ	摩滅
	108	9-B	〃	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	ナデ	
	109	3-C	〃	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ヨコナデ	
	110	10-B	〃	長石・石英	暗茶褐色	ナデ	ヨコナデ	多条太形凹線
	111	6-C	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	ヨコナデ	孤状に結ぶ
	112	11-A	〃	角閃石・長石	明茶褐色	ナデ	ナデ	孤状に結ぶ
	113	9-B	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	丁寧なナデ	ナデ	
	114	9-C	〃	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	ナデ	
	115	9-C	〃	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	ヨコナデ	
	116	6-C	〃	角閃石・長石・石英・金雲母	明褐色	荒いナデ	荒いナデ	
	117	8-C	〃	角閃石・長石・石英	茶黄褐色	ナデ	ヨコナデ	
	118	7-C	〃	角閃石・長石・石英	茶灰色	ナデ	ヨコナデ	
	第26図	119	7-C	Ⅵ	角閃石・長石	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ
120		7-C	〃	角閃石・長石・石英	茶灰色	ナデ	ヨコナデ	
121		7-B	〃	角閃石・長石・石英・金雲母	明褐色	ナデ	?	
122		10-B	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	荒いヨコナデ	
123		9-C	〃	角閃石・長石	茶灰色	ナデ	ナデ	
124		8-B	〃	角閃石・長石・金雲母	茶褐色	磨き	ナデ	曲線文
125		6-C	〃	角閃石・長石・金雲母	暗茶褐色	ナデ	ナデ	
126		8-C	〃	角閃石・長石・石英	茶黄褐色	ナデ	ヨコナデ	
第27図	127	8-C	Ⅵ	角閃石・長石・石英	暗黄茶褐色	ナデ	ナデ	曲線文
	128	8-C	〃	角閃石・長石・石英	暗黄茶褐色	ナデ	ナデ	
	129	8-C	〃	角閃石・長石・石英	明褐色	ナデ	ナデ	曲線文
	130	8-C	〃	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	ナデ	摩滅
	131	8-C	〃	角閃石・長石・石英	暗灰色	丁寧なナデ	ヨコナデ	
	132	6-C	〃	角閃石・長石	茶褐色	磨き	磨き	調整・焼成良好
	133	7-C	〃	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	スス付着
第28図	134	8-C	Ⅵ	角閃石・長石・石英	茶灰色	ナデ	ナデ	
	135	11-B	〃	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	
	136	11-A	〃	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	ナデ	
	137	6-C	〃	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	ナデ	
	138	10-C	〃	角閃石・長石・石英	黒褐色	丁寧なナデ	丁寧なヨコナデ	
	139	10-C	〃	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	ナデ	
	140	10-B	〃	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	ナデ	
	141	10-B	〃	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	ナデ	
	142	10-B	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	ナデ	
	143	4-C	〃	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
	144	8-C	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	ヨコナデ	
	145	8-C	〃	角閃石・長石	明茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
第29図	146	6-C	Ⅵ	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	荒いヨコナデ	
	147	6-C	〃	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	ナデ	
	148	6-C	〃	角閃石・長石・石英	明茶褐色	ナデ	ヨコナデ	スス付着
	149	8-C	〃	角閃石・長石・石英	暗茶灰色	ナデ	ヨコナデ	
	150	8-C	〃	角閃石・長石・石英	暗黄茶褐色	ナデ	ナデ	

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
第29図	151	3-B	Ⅵ	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ナデ	凹線文上位に刺突連点
	152	8-C	//	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
	153	7-C	//	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	ナデ	
	154	8-B	//	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	ナデ	無文
	155	8-C	//	角閃石・長石	暗褐色	ナデ	ナデ	無文
	156	11-B	//	角閃石・長石・石英	淡茶灰色	ナデ	ナデ	無文
第30図	157	7-B	Ⅵ	角閃石・長石・石英・金雲母	明褐色	ナデ	丁寧なナデ	
	158	6-B	//	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
	159	10-C	//	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
	160	10-B	//	角閃石・長石・石英	明褐色	丁寧なナデ	ナデ	
第31図	161	6-C	Ⅵ	角閃石・長石・石英	茶褐色	丁寧なナデ	荒いヨコナデ	隆起帯に刻目
第32図	162	6-C	//	角閃石・長石・石英	茶褐色	丁寧なナデ	荒いヨコナデ	隆起帯に刻目
	163	6-C	//	角閃石・長石・石英	茶褐色	丁寧なナデ	荒いヨコナデ	隆起帯に刻目
	164	6-C	//	角閃石・長石・石英	暗茶褐色	丁寧なナデ	荒いヨコナデ	隆起帯に刻目、スス付着
	165	7-B	//	角閃石・長石・石英	明茶褐色	丁寧なヨコナデ	磨き	微隆突帯、スス付着
	166	6-C	//	角閃石・長石・石英	明茶褐色	丁寧なヨコナデ	磨き	微隆突帯
	167	6-C	//	角閃石・長石・石英	茶灰色	丁寧なヨコナデ	磨き	微隆突帯
	168	6-C	//	角閃石・長石・石英	明茶褐色	丁寧なヨコナデ	磨き	微隆突帯
	169	6-C	//	角閃石・長石・石英	明茶褐色	丁寧なヨコナデ	ヨコナデ	隆起帯に爪形の刻目
	170	6-C	//	角閃石・長石・石英	明茶褐色	丁寧なヨコナデ	ヨコナデ	隆起帯に爪形の刻目
	171	6-C	//	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	ヨコナデ	凹線文帯
	172	6-C	//	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	ナデ	
	173	7-B	//	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	
	第33図	174	2-B	Ⅵ	角閃石・長石	茶褐色	丁寧なナデ	ヨコナデ
175		6-C	//	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	ナデ	
176		3-B	//	角閃石・長石	褐色	ナデ	ナデ	梅華皮状
177		3-B	//	角閃石・長石・石英	茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	梅華皮状
178		3-B	//	角閃石・長石・石英	茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	梅華皮状
179		3-B	//	角閃石・長石・石英	赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
第34図	180	8-C	Ⅵ	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	ヨコナデ	摩滅
	181	10-C	//	角閃石・長石・石英	茶黄褐色	ナデ	ナデ	区画内縄文
	182	7-C	//	角閃石・長石・石英	明褐色	ナデ	ナデ	区画内網目状燃系文
	183	6-C	//	角閃石・長石・石英・金雲母	暗茶褐色	ナデ	ナデ	区画内網目状燃系文
	184	6-C	//	角閃石・長石・石英	茶灰色	ナデ	ヨコナデ	区画内燃系文
	185	6-C	//	角閃石・長石	明褐色	ナデ	ナデ	区画内燃系文
	186	8-B	//	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	荒いヨコナデ	区画内網目状燃系文
	187	8-B	//	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	荒いヨコナデ	区画内網目状燃系文
	188	7-B	//	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ヨコナデ	区画内燃系文
	189	6-C	//	角閃石・長石	淡茶褐色	ナデ	ナデ	区画内燃系文
第35図	190	8-C	Ⅵ	角閃石・長石・石英	黒褐色	磨き	磨き	区画内刺突連点文
	191	8-C	//	角閃石・長石	茶黒褐色	磨き	磨き	スス付着
	192	7-C	//	角閃石・長石・石英	茶黒褐色	磨き	磨き	区画内刺突連点文
	193	8-C	//	角閃石・長石・石英	茶黒褐色	丁寧なナデ	磨き	区画内刺突連点文
	194	7-B	//	角閃石・長石・石英	茶褐色	丁寧なナデ	丁寧なヨコナデ	区画内刺突連点文
	195	8-C	//	角閃石・長石・石英	黒褐色	磨き	丁寧なヨコナデ	区画内刺突連点文

写 真 图 版



土層断面 (5T)



土層断面 (10T)



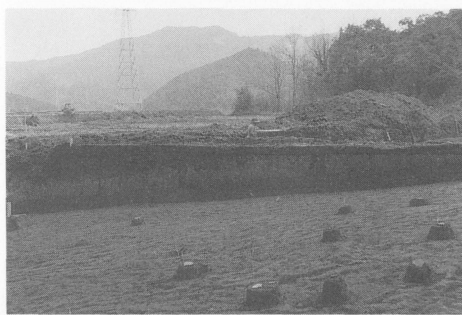
A地区集石出土状況 (1T)



B地区1号畦畔土層断面



B地区1号畦畔 (東から)



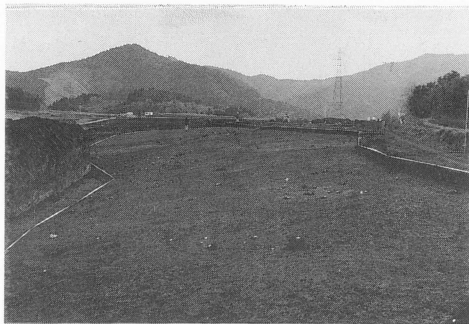
B地区2号畦畔 (西から)



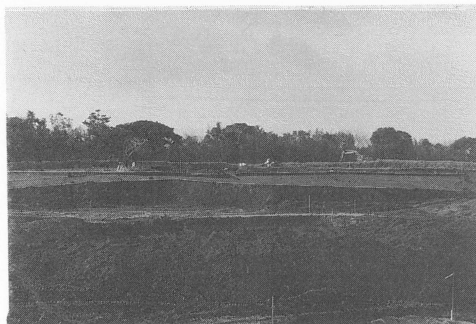
B地区遺物出土状況 (東から)



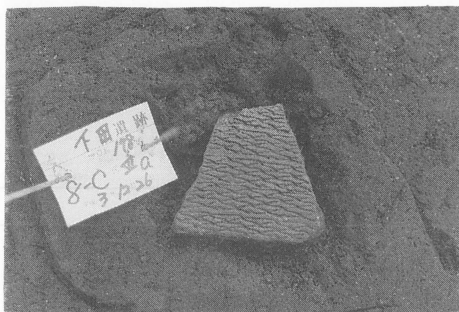
B地区遺物出土状況 (東から)



B地区拡張区（西から）



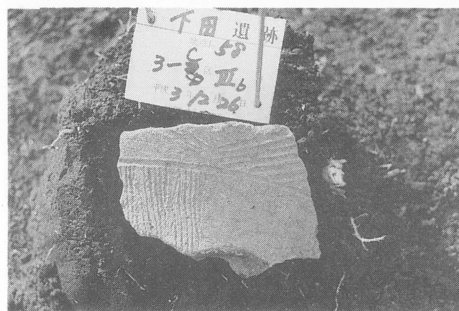
B地区拡張区（北から）



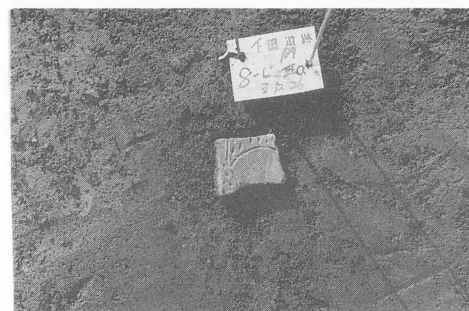
土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



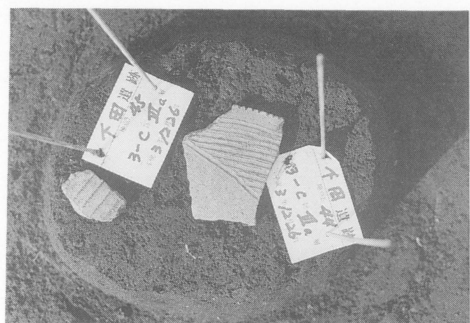
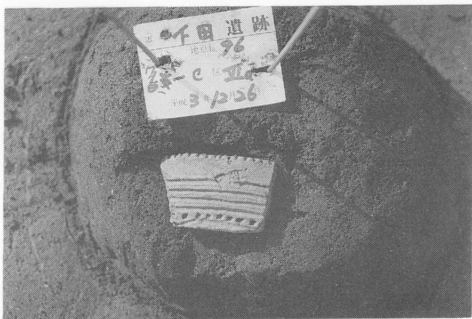
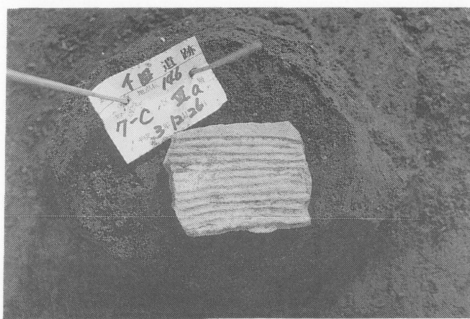
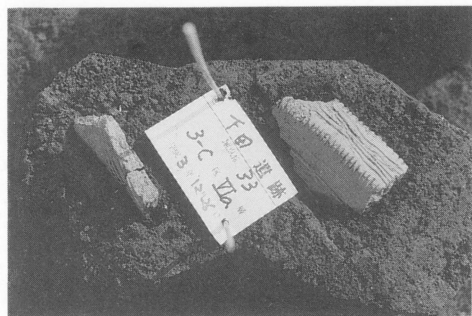
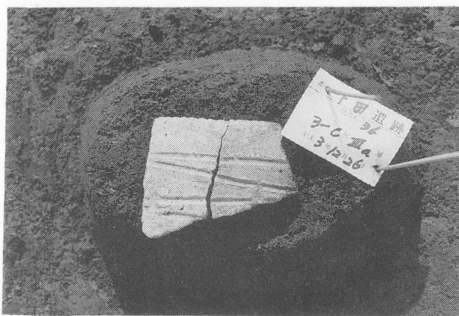
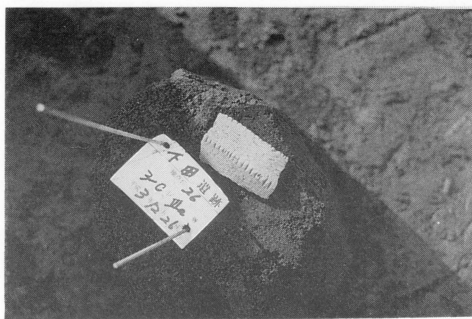
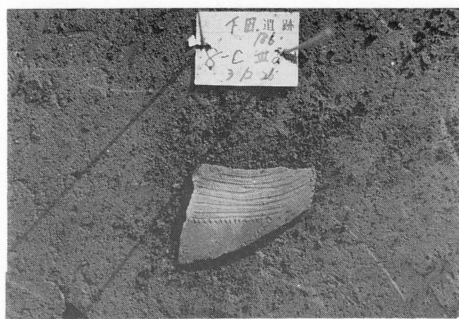
土器出土状況



土器出土状況

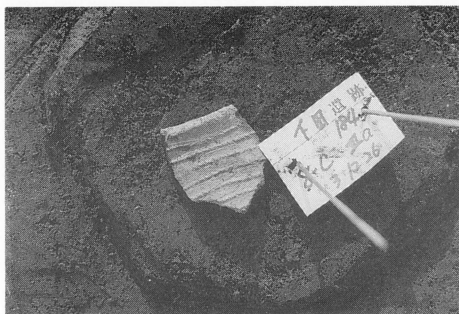


土器出土状況



B地区土器出土状況

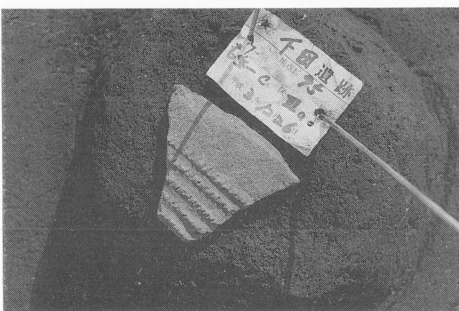
図版 4



壺形土器出土状況



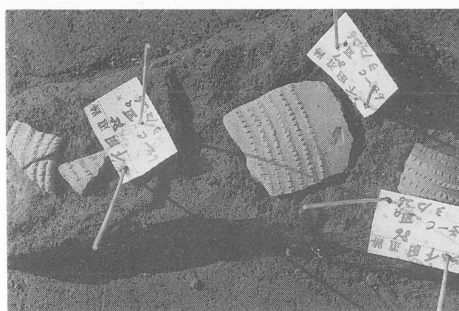
耳栓出土状況



壺形土器出土状況



石鎌出土状況



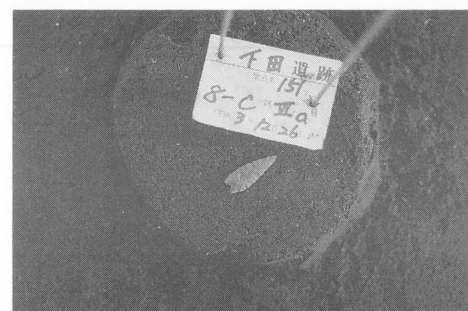
壺形土器出土状況



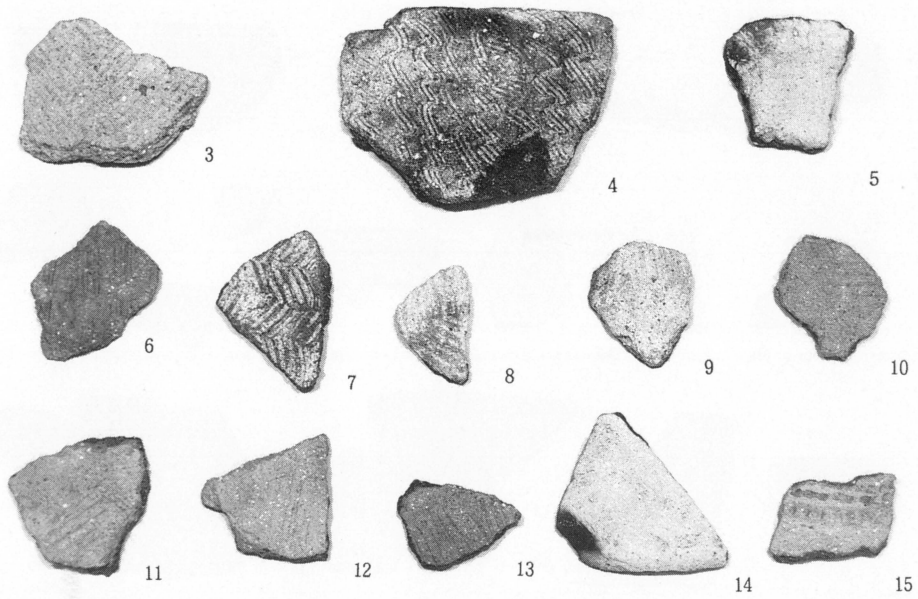
石鎌出土状況



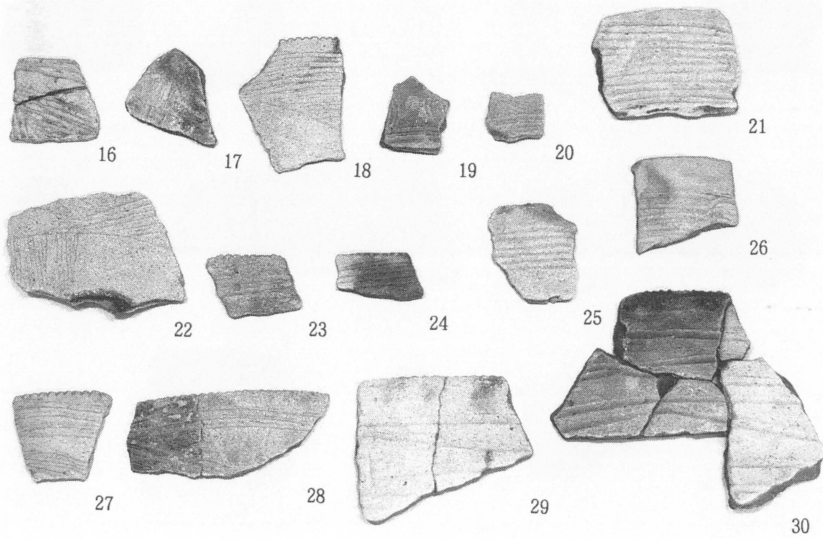
壺形土器出土状況



石鎌出土状況

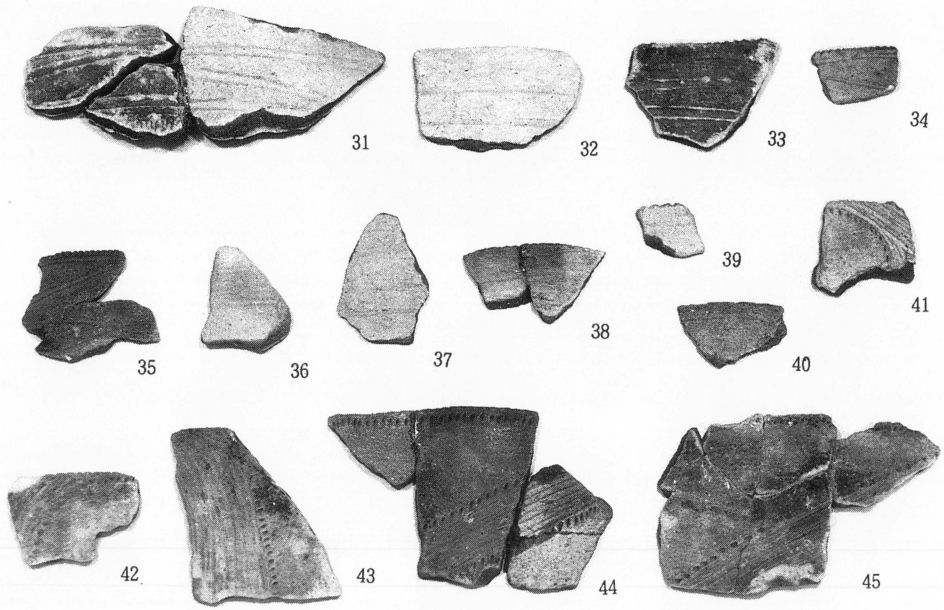


第I~IV 類土器 (3~15)

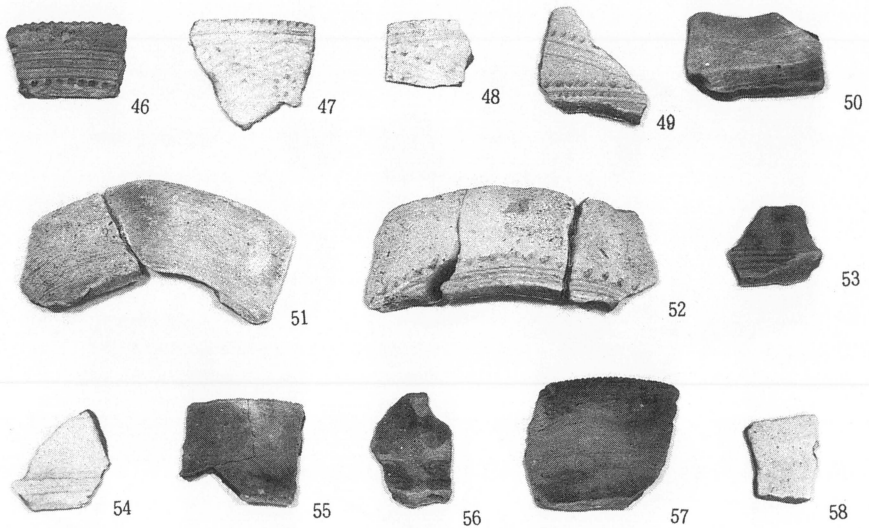


第V 類土器 (16~30)

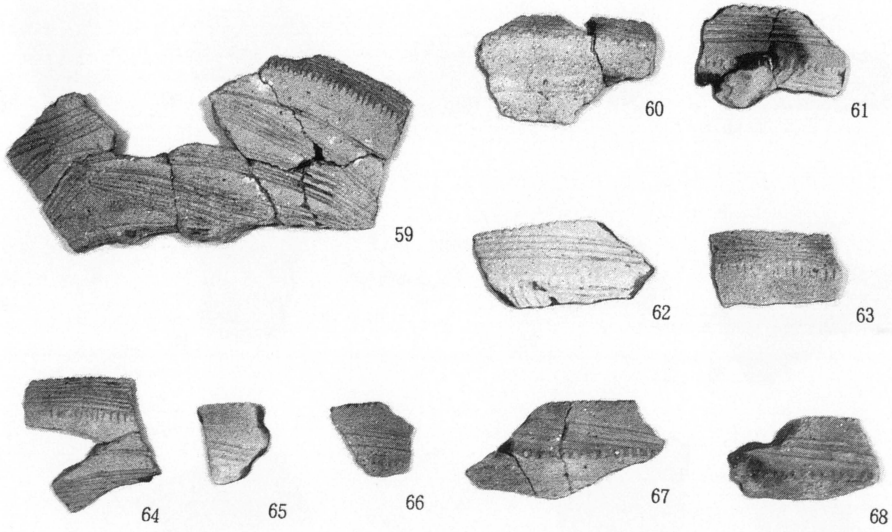
図版 6



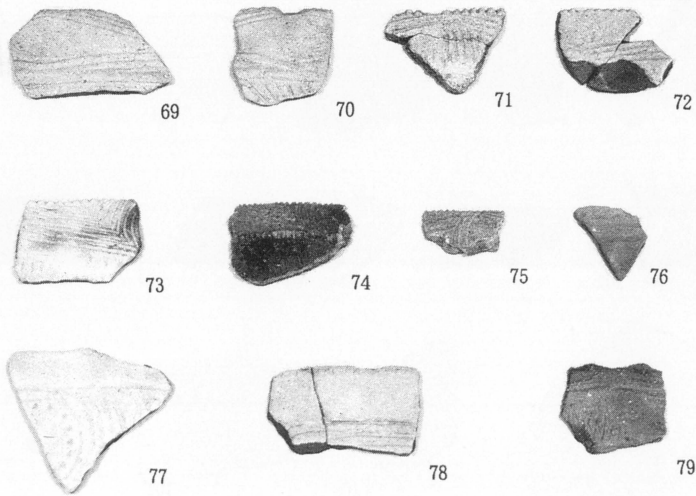
第V 類土器 (31~45)



第V 類土器 (46~58)

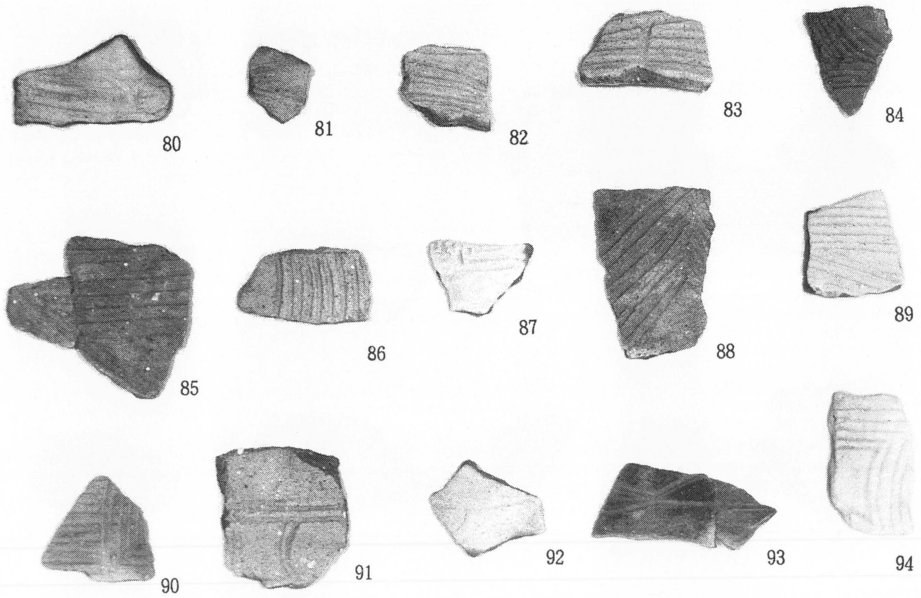


第V 類土器 (59~68)

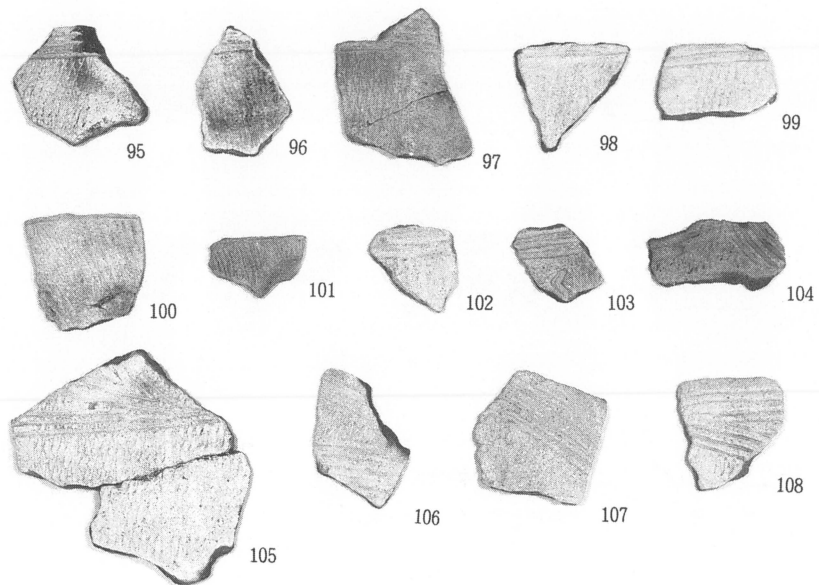


第V 類土器 (69~79)

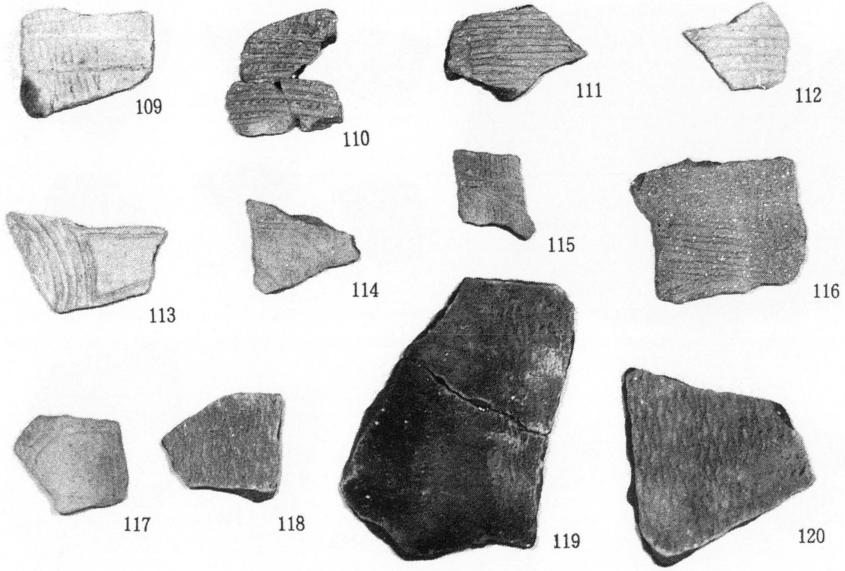
図版
8



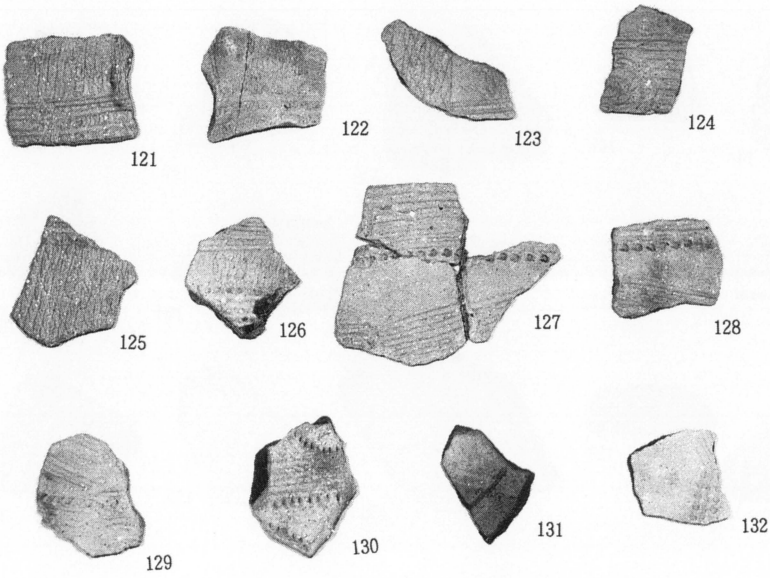
第V 類土器 (80~94)



第V 類土器 (95~108)

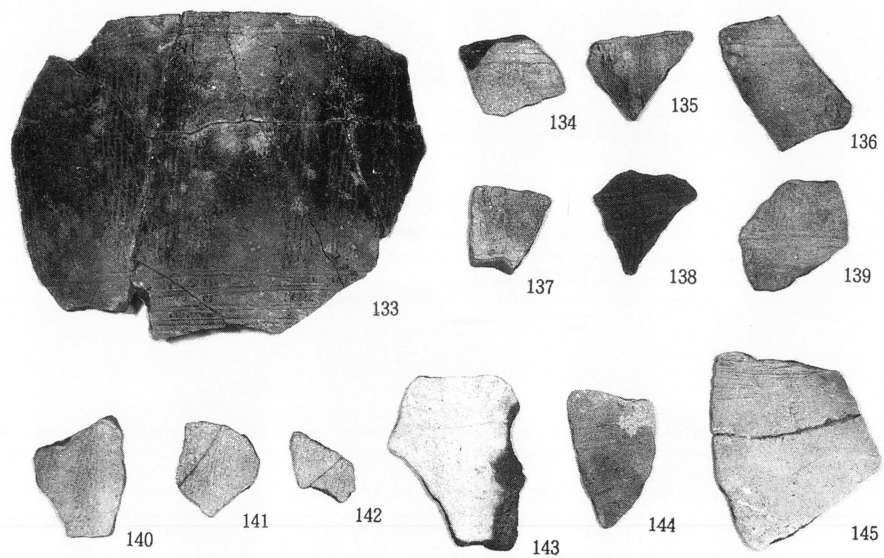


第V 類土器 (109~120)

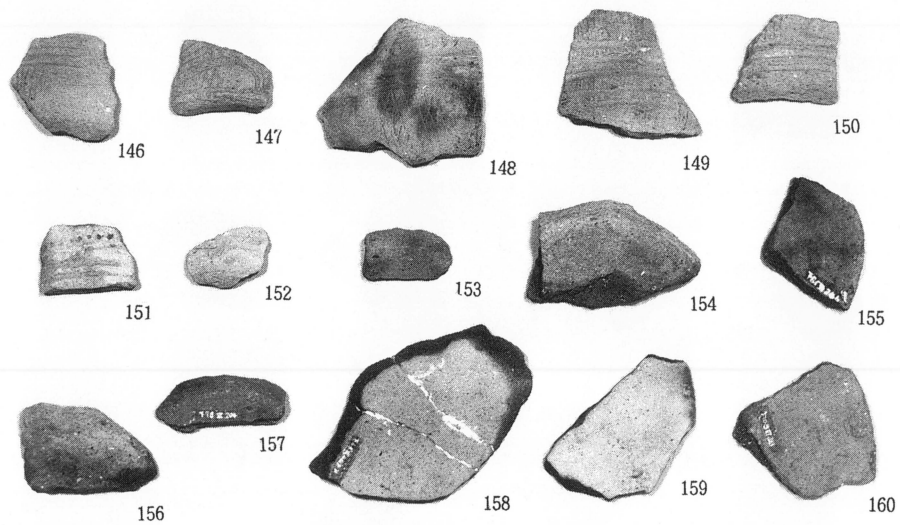


第V 類土器 (121~132)

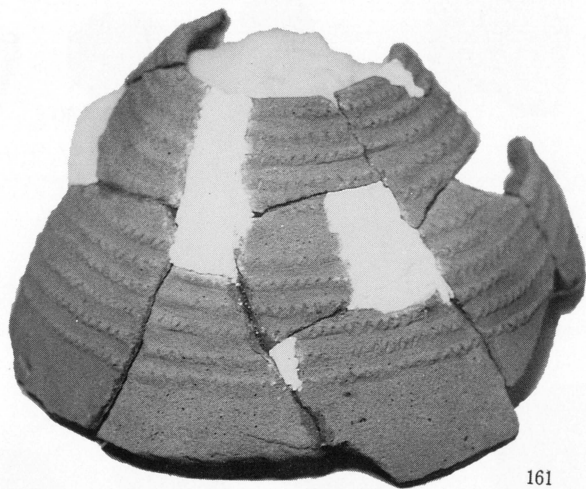
図版
10



第V 類土器 (133~145)

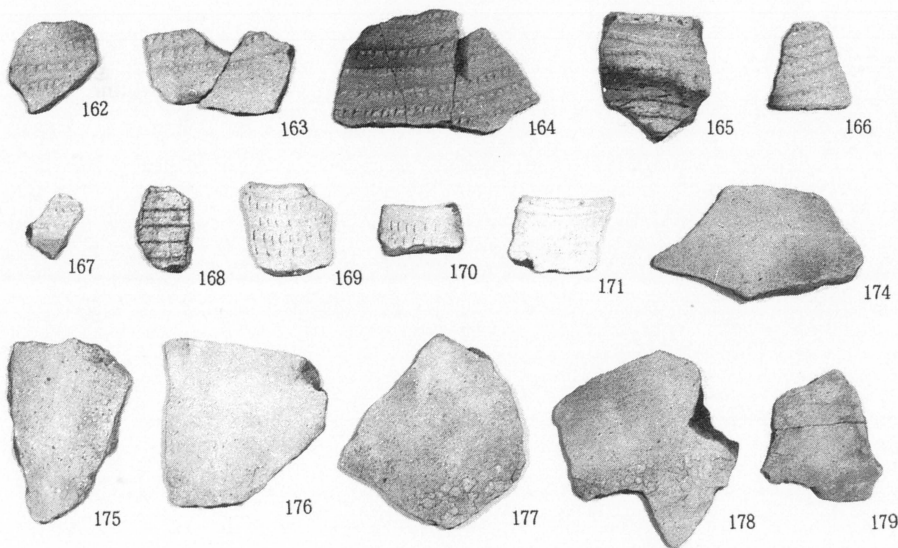


第V 類土器 (146~160)



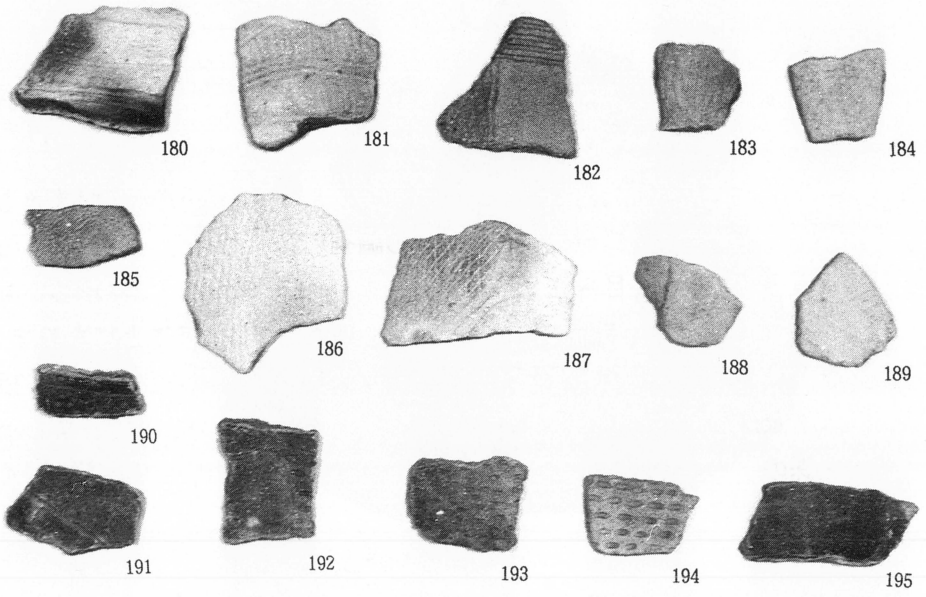
161

第V 類土器 (161)



第V 類土器 (162~179)

图版
12



第VI 類土器 (180~195)

あとがき

下田遺跡の確認調査は、心地よい秋風の吹く10月末に始まり、ミソレ混じりの寒風吹きすさぶ年の暮れに終了しました。

調査当初、確認トレンチの出土遺物が少量であったため、多少の安堵感をもって調査を進めていましたが、緊急発掘調査区域の調査に入り、多量の撚糸文系の土器が出土し、さらに、最近注目されている壺形土器をはじめ、県内では珍しい耳栓の出土等も相次ぎ、限られた時間の中で慌ただしく調査を完了することになりました。

報告書執筆は初めての体験でもあり、不安と緊張の中で多くの方々からご指導・ご教示を頂きながら、ようやく報告書刊行にまでたどりつくことができました。特に、県文化課の新東晃一氏には、御多忙にもかかわらず懇切に指導を頂き厚くお礼申し上げます。

なにぶんにも浅学非才のため、多くの誤りを指摘されることになると思いますが、向学の徒に免じ、厳しいご教示を頂けたらと願っております。

最後になりましたが、限られた時間のなかで無理をしていただいた作業員の皆さんには、改めて深く感謝を申し上げます。

(御指導を頂いた先生方)

立神次郎、池畑耕一、井ノ上秀文、宮田栄二、堂込秀人、東和幸、上田耕
中村和美、その他鹿児島県教育庁文化課職員(敬称略)

(発掘作業員)

春口峯次、春口繁、山村又男、下山学、中野喜義、春口フミエ、柳満子
田之上鈴子、坪田和子、下田エル、岩田スズエ、上田美江子、藤井礼子
春口康子、上杉みゆき、樽野次子、吉原シズミ、上田智江、片村光子
中野光子、山下ミキ、宇都幸子、水流トシコ、原口ミエ、北村弘子

(整理作業員)

上杉みゆき、樽野次子、寶楽洋子、畠中しげ子、渡瀬早苗、山内章子

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(22)

下 田 遺 跡

発行日 平成4年3月

発行 志布志町教育委員会(鹿児島県曾於郡志布志町志布志2542)

印刷所 志布志印刷(鹿児島県曾於郡志布志町安楽1966)